

# 韋昭『吳書』について

満 田 剛

## 目次

はじめに

〔一〕 韋昭の傳記と著作

〔二〕 韋昭『吳書』佚文集成について

〔三〕 佚文から見た韋昭『吳書』の性格

〔四〕 韋昭『吳書』と諸葛恪政權

おわりに

## はじめに

陳壽『三國志』吳書（以下、『吳志』と略す）の典據としてまず考えられるのは、韋昭がまとめた吳の正史である韋昭『吳書』である。この韋昭『吳書』は完全な形では現存していない。『隋書』卷三十三經籍二史部正史類に

吳書二十五卷 韋昭撰。本五十五卷，梁有，今殘缺。

とある<sup>1)</sup>ことから、すでに『隋書』經籍志がつくられた段階で全ては残っていなかったことがわかる。したがって、『三國志』裴松之注（以下、裴注と略す）や『世說新語』劉孝標注、『後漢書』章懷太子注、『北堂書鈔』、『藝文類聚』、『文選』李善注、『初學記』、『太平御覽』、『事類賦』注などに引用された部分的な形でしか見ることはできない。そのためもあってか、陳博「試論韋昭《吳書》的特點及其價值」（『歷史文獻研究』北京新6輯 1995年）、「韋昭《吳書》考」

〔文獻〕1996—3 1996年)のような先行研究が挙げられる<sup>2)</sup>ものの、基礎的かつ総合的な研究がなされているとは言い難い。

また、韋昭といえば『吳書』の著者としてよりもむしろ『國語』注をまとめた人物として有名であるが、彼の著作の中でも『吳書』は彼自身が生きていた現實の政治の世界に最も密接な関係をもつものであると言えるだろう。『吳書』は孫吳王朝が編纂を命じた「同時代史」であり、したがって史書としてだけではなく吳國のプロパガンダとしての性格も持つからである。それ故、『吳書』の持つ性格や特徴に関する認識を深めることは、彼の立場や思想を把握し、彼の他の著作について考察する上でも非常に重要であろう。

そこで、本論文では陳博氏の見解を参考としつつ、韋昭『吳書』佚文の性格に関する分析を行ない、さらに基礎的包括的な研究を進めていきたいと考えているが、本論に入る前にまずここで陳博氏の見解を簡単に整理しておきたい。

陳氏の「韋昭《吳書》考」の論旨は以下のようなものである。

- ① 韋昭『吳書』は韋昭のほかに周昭、薛瑩、梁廣、華覈らが協力することで編纂されたが、最終的には韋昭一人が纏め上げた。
- ② 『吳書』は紀伝體の史書であるが、表・志はない。
- ③ 『隋書』經籍志では『吳書』は二十五卷とあり、『舊唐書』經籍志には四十四卷・『新唐書』藝文志には四十八卷とあるが、これは隋代までではなくなくなっていた完本が、社會が安定した唐代になって出現したためである。
- ④ 『吳書』の記述の上限は『吳書』武烈皇帝紀にあったと推定される孫堅の生誕の記事(永壽元年〔155年〕)であり、下限は韋昭が入獄した鳳皇二年(273)前後である。
- ⑤ 『吳書』の目次は、本紀の有無を除き『吳志』と共通する内容については大同小異であると考えられる。
- ⑥ 『吳書』には、『吳志』には存在しない陶謙・陳化・馮熙・沈珩・李肅・鄭泉・趙咨などの傳があった。陳壽は魏や蜀の人物と比較して遜色が明らかだと判断したためにこれらの人物を削除したのであろう(陶謙を除く)。

- ⑦ 『吳志』は『吳書』の内容を削るだけでなく、篇目や内容を増補している。特に『吳書』が取り上げることのできなかった韋昭没後の記事や華覈・薛瑩・韋昭らの傳などはほとんど陳壽の増補である。それ故、陳壽本人が増補した韋昭については司馬昭の諱を避けて「韋曜傳」としたのであろう。董昭や張昭、周昭が避諱されていないのは陳壽が典據とした三國時代の史書にもともと記されていたからである。
- ⑧ 『吳志』と『吳書』の編目の配置は基本的に同じである。卷数の違いは内容を合わせたり分けたりした結果である。

また、「試論韋昭《吳書》的特點及其價值」における考察は、以下のようにまとめることができる。

- ① 韋昭『吳書』の長所としては、王沈『魏書』などと異なり權力者に遠慮することなく「直書」をしていることや、豊富な史料に依據していること、簡潔な文章で事實を記録していることが挙げられる。
- ② 缺點としては『吳書』が一部未完成であること、志や表がないこと、歴史的に重要な人物を採録していないこと、唯物史觀的思想の萌芽があるが封建思想の束縛から逃れていないことが挙げられる。
- ③ 『吳書』の價值は『吳志』よりも上であり、『吳書』佚文は三國時代の政治史的・地理的史料の缺乏を補うものであり、史學史的にも大變重要なものである。陳壽『三國志』でも『魏志』・『蜀志』が記述に偏りを見せるのに對して『吳志』が不偏不倚であるのは各書の史料の來源と密接な關係があろう。『吳志』が『吳書』の内容を直接的に引き継いでいるかは『吳書』の研究を深めることでさらに理解が深まっていくと考えられる。

## 〔一〕 韋昭の傳記と著作

著者の韋昭については『三國志』卷六十五王樓賀韋華傳に傳があり、そこでは韋曜として記載されている。

韋昭(204~273年、字は弘嗣)は呉郡雲陽の人で、若い頃から學問を好み、良い文章を書くことができた。建興元年(252)孫亮が即位し諸葛恪が輔政の任に就くと太史令となり、華覈や薛瑩・周昭・梁廣らとともに『呉書』を撰述することになった。

永安五年(262)に孫休が即位すると中書郎・博士祭酒となり、劉向の故事にならって衆書を校定することになった。その後、孫休は韋昭を侍講の任にあてようとしたが、左將軍の張布が強く反対したために沙汰やみとなった。

孫皓が即位すると(264)、高陵亭侯となり中書僕射、さらに實際の職務を省かれるということで侍中・左國史となった。孫皓は『呉書』の中に父である孫和の本紀を立てたいと願ったが、韋昭は孫和が帝位に登っていないため傳とするべきだと主張して譲らなかった。これ以外にも様々なことが積み重なって孫皓から叱責を被ることが多くなり、その後鳳皇二年(273)に獄に下され、處刑された。

このように見ると、韋昭は政治家としては後に引用する『三國志』卷四十七呉主傳裴注所引『志林』にあるように張溫の派閥に屬していたということ以外はよくわからず、ほとんどと言っていいほど實績が無い。むしろ『呉書』の編纂などを通じて呉國のために學者としての力を生かして活躍していたようである。

著作としては『呉書』のほかに、『洞紀』・『春秋外傳國語』注・『漢書音義』<sup>3)</sup>・『孝經解贊』・『辨釋名』・『博弈論』・『因獄吏上辭』・『雲陽賦』や孫呉の鼓吹曲などがあるが、『春秋外傳國語』注(『國語』解詁を含む)や『呉志』に記載された『博弈論』・『因獄吏上辭』、『宋書』卷二十二樂志にある孫呉の鼓吹曲以外はまとまった形では残されていない<sup>4)</sup>。ただ、彼の『春秋外傳國語』注は唐代以前の『國語』注で現在唯一残っているものであり、『國語』研究史において重要な位置を占めている<sup>5)</sup>。

『三國志』卷六十五の記載を見ると、韋昭が刑死したこと、韋昭『呉書』には孫和を扱った本紀がなかったことが記されている。また、『史通』<sup>6)</sup>卷十二古今正史には

吳大帝の季年、始めて太史令丁孚、郎中項峻に命じて吳書を撰ばしむ。孚、峻俱に史才に非ずして、其の文紀錄するに足らず。少帝の時に至りて、更に韋曜、周昭、薛瑩、梁廣、華覈に敕して往事を訪求せしめ、相い與に記述せしむ。並びて作りたる中で、曜、瑩を首と爲す。歸命侯の時に當りて、昭、廣先に亡く、曜、瑩徒黜せられ、史官久しく闕け、書遂に聞く無し。覈表して曜、瑩を召し前史を續成せしむることを請ふ、其の後曜獨り其書を終わらしむ、定めて五十五卷と爲す。

とあり、『三國志』卷五十三薛綜傳附薛瑩傳には

後定誅せらる、皓聖谿の事を追ひて、瑩を獄に下し、廣州に徙す。右國史華覈上疏して曰く：「……大皇帝の末年、太史令丁孚、郎中項峻に命じて始めて吳書を撰ぜしむ。孚、峻俱に史才に非ずして、其の撰び作る所、紀錄するに足らず。少帝の時に至りて、更に韋曜、周昭、薛瑩、梁廣及び臣の五人を差して、往事を訪求せしめ、共に撰び立つる所、備はりて本末有り。昭、廣先に亡く、曜恩に負き罪を蹈み、瑩は出でて將と爲り、復た以て過徙し、其の書遂に委滯し、今にいたるも未だ撰奏せず。(後略)」

とある。『史通』は『三國志』卷五十三を見て書いたものと思われるが、韋昭『吳書』序文を見ていた可能性もある。また、陳氏も指摘されていることであるが、『玉海』卷四十六所引『中興書目』に

項峻『吳書』を撰び、韋昭續けて之を成す、五十五卷、『隋志』には二十五卷。……壽集めて『三國志』と爲す。

とあることから、韋昭『吳書』は最初から書き直したのではなく、項峻の『吳書』を受け繼いで書かれたとも考えられる。先に引用した『三國志』卷五十三の記事や『三國志』卷六十五韋曜傳の

而るに華覈上疏を連ね曜を救はんとして曰く：「……今吳書當に千載に垂らんとし、諸史を編次すべし、後の才士善惡を論次するに、曜の如き良才を得るに非ずんば、實に不朽の書を闕け使む可からず。臣の如き頑蔽は、誠に其の人に非ず。(後略)」

という記載を見ると、『吳書』は韋昭が罪を得た頃にはほぼ完成していたこと

がわかる。ただ、鳳皇二年（273）に韋昭が獄死した後の編纂過程はよくわかっていない。

以上のような記事から、韋昭『吳書』の編纂経緯に関しては

- ①大皇帝（孫權）治世の末年に太史令の丁孚と郎中の項峻が命ぜられて『吳書』の編纂を開始したが、彼らには史才がないと考えられ不十分なものとされた。
- ②少帝（孫亮）のころになって諸葛恪が政權を握ると〔建興元年（252）〕、韋昭、周昭、薛瑩、梁廣、華覈の五人が編纂を命じられたが、周昭は孫休によって誅殺され、梁廣も早く亡くなり、薛瑩は地方勤務から配流となり、韋昭は鳳皇二年（273）に獄に下されてしまうことで都には華覈一人となって作業がストップしてしまった。
- ③『史通』によると、最後は韋昭が一人で完成させたことになっている。
- ④『吳書』は韋昭が罪を得た頃にはほとんどできあがっており、紱や贊ができていないという状態であった。
- ⑤鳳皇二年（273）に韋昭が獄死した後の編纂過程はよくわかっていない。手が加えられなかった可能性もある。もし編纂が続いていたとすると、華覈が天冊元年（275）から數年後には亡くなっていることから、最後の仕上げをしたのは薛瑩ではないかと考えられる。

とまとめることができる。

ここで注目しておきたいのが、孫權治世の「季年」（もしくは「末年」）に『吳書』編纂を命ぜられた丁孚・項峻に「史才」がないと考えられ、諸葛恪政權になって韋昭らが任命されたという経緯であるが、これについては後で考察したいと思う。

## 〔二〕 韋昭『吳書』佚文集成について

現在のところ、韋昭『吳書』佚文収集は以下のような状況となっている。

『三國志』裴注から117條、『世說新語』劉孝標注から3條、『後漢書』章懷太

子注から6條、『北堂書鈔』から22條、『藝文類聚』から14條、『類林』からは1條、『文選』李善注から7條、『初學記』から5條、『太平御覽』から61條、『事類賦』注から6條を見つけることができた。また、『水經注』からは管見の限りを見つけることができなかった。敦煌文書について見ると、王三慶『敦煌類書』などからも管見の限りを見つけることができなかった。

裴注の體裁に關して、彼の「『三國志』注を上る表」には

- ①「壽の載せざる所、事宜しく存録すべきは、則ち以て其の闕を補ひ取り畢らざるなし。」
- ②「同じ一事を説くも辭に乖離有り、或ひは事本異に出でて疑ひを判ずる能はざるは、並びに皆抄納し以て異聞に備ふ。」
- ③「紕謬顯然とし、言理に附せざるは、則ち違に隨ひて矯正し以て其の妄を懲らしむ。」
- ④「時事の當否及び壽の小失は、頗る愚意を以て論辨する所有り。」

と記されており、これによると注の基準を4種類に大別できるが、上記の裴松之自身が語る注の基準から判断すると、裴注所引韋昭『吳書』佚文は①のものがほとんどである（ただ、もともと陳壽が記録していながら簡潔に過ぎる部分を補足したものと陳壽『三國志』にまったく記事がない事柄を補足したものとをあわせてこのようになっている）。すなわち、陳壽『三國志』と比較すると内容が重複しないもの、陳壽が削除した内容を補足するものが大半だということである。その他には『三國志』と内容が若干異なる（上記の基準の②にあてはまる）ものが存在しているが、實際のところ、裴注所引『吳書』については陳壽『三國志』と同じ事柄を取り上げて内容が異なるものはほとんどない（〔表1〕裴松之注所引『吳書』佚文目録を参照されたい）。

陳壽が削除したと思われる内容を補足した（上記の裴松之「『三國志』注を上る表」の4つの基準の①にあてはまる）『吳書』の佚文は多いが、ここでは一例として

韋曜吳書に曰く：太祖嵩を迎ふるに、輜重百餘兩。陶謙は都尉張闔を遣は

し騎二百を將いて護送せしむ、闔泰山華、費間に於ひて嵩を殺し、財物を取り、因りて淮南に奔る。太祖咎を陶謙に歸す、故に之を伐つ。

（『三國志』卷一武帝紀）

を擧げておく。『三國志』卷一武帝紀の

興平元年春、太祖徐州より還る、初め、太祖の父嵩、官を去りて後譙に還る、董卓の亂に、難を瑯邪に避け、陶謙に害せらる所と爲る、故に太祖の志讎を復するに在りて東伐す。

に附されている文章であるが、この『吳書』の文章の前に

世語曰く：嵩泰山の華縣に在り。太祖泰山太守應劭をして家を送り兗州に詣でしめるに、劭の兵未だ至らずして、陶謙密かに數千騎を遣はして掩ひ捕ふ。嵩の家以て劭の迎へと爲し、備へを設けず。謙の兵至り、太祖の弟徳を門中にて殺す。嵩懼れて、後垣を穿ち、先づ其の妾を出すも、妾肥えて、時に出づるを得ず；嵩廁に逃るるも、妾と俱に害せられ、闔門皆死す。劭懼れて、官を棄て袁紹に赴く。後太祖冀州を定めるに、劭時已に死す。

（『三國志』卷一武帝紀）

が引用されている。裴松之は陳壽が省いた曹操の父・曹嵩が殺害された事情を補足するためにこれを引用したと思われる。

陳壽はこのような事情を記載していない。「曹操は父を殺された復讐のために陶謙を討伐した」という事實を「簡潔」に記載しており、このような内容は逸話的・小説的であるということで削除したと考えられる。ただ、王沈『魏書』武帝紀・魚豢『魏略』などでこのような事情はつかんでいたと思われ、陳壽が韋昭『吳書』も參照し内容を踏まえて記載していることは間違いないであろう。

『三國志』と内容が若干異なる（上記の裴松之「『三國志』注を上る表」の4つの基準の②にあてはまる）ものとしては、以下のような佚文が擧げられる。

吳書曰く：謙死する時、年六十三、張昭等之が哀辭を爲して曰く：「猗歟使君、君侯將軍たりて、秉りて懿徳を膺し、允に武允に文、體剛直に足りて、守るに溫仁を以てす。舒及び盧に令として、民を遺愛す；幽暨び徐に



牧として、甘棠と是れ均し。憬憬たる夷、貊、侯に頼りて以て清し；蠢ひたる妖寇、侯に匪れば寧からず。唯だ帝績を念ひて、爵命以て章らかなり、既に牧且つ侯、土を溧陽に啓く。遂に上將に升起、號を安東に受け、將に世難を平げんとし、社稷是れ崇ぶ。降年永からず、奄忽して殂薨す、喪覆侍を失ひて、民困窮を知る。曾て旬日ならず、五郡潰崩す、哀しき我の人か、將に誰か仰ぎ憑かん、追思して及ぶ靡し、皇穹仰ぎ叫ぶ。嗚呼哀しきかな！」謙の二子：商，應，皆仕へず。 (『三國志』卷八 陶謙傳)

『吳書』陶謙傳と思われるこの文章は『三國志』魏書（以下『魏志』と略す）卷八陶謙傳の

興平元年，……是歲，謙病死す。

に附されているものだが、この文章と比較すると陳壽が削除した陶謙の享年と張昭らの哀辭、陶謙の子たちについて補足している。削除の理由としては哀辭などを『三國志』に記載すべき事実と認めず、歴史的「事實への謹慎ぶり」<sup>7)</sup>を求めたからとも考えられるが、この直前の『魏志』卷八陶謙傳本文での

而るに謙道に背き情に任す：……刑政和を失ひ、良善多く其の害を被る、是れに由りて漸く亂る。

という陶謙評と『吳書』の内容を比較すると、陳壽は陶謙を評するにあたって『吳書』を典據としなかったと考えられる。

このような陶謙に對する評價の違いを見ると、王沈『魏書』を主な典據の一つとしている『魏志』と韋昭『吳書』のそれぞれの傾向が垣間見える。王沈『魏書』などでは曹操と敵對した人物として描かれたために評價が低く、『吳書』では全く同じ理由で逆に高い評價が下されているように見受けられる。加えて、張昭が徐州の出身であることも関係しているのであろう。

②にあてはまると思われる上記の文章の性格として指摘できるのは、事實上魏王朝を成立させた曹操にとって都合が悪いと考えられる部分で陳壽が取り上げていないものが異聞として記されているということである。

加えて、〔表1〕を見てもわかるように、裴注所引『吳書』は特定の人物に関する記載が多いことが指摘できる。特に陶謙・張紘・甘寧・虞翻については

引用が多い。これらの人物については、韋昭『吳書』に記載がありながら陳壽『三國志』には採用されなかった部分が多いということであろう。

このように見ると、裴松之が異聞として引用した『吳書』佚文には一定の傾向がある。しかし、基本的には陳壽の記述が韋昭『吳書』に依據しながらも簡潔に過ぎるところを補うためか、陳壽が記さなかった内容を補うため、もしくは陳壽の記述の典拠を示すための引用がほとんどであることは指摘しておかねばならないだろう。

『世說新語』劉孝標注（以下、『世說』注と略す）所引『吳書』佚文には裴注所引『吳書』と同内容のものが1條、異なっているものが2條ある。先に引用した『隋書』經籍志を見ると梁代には『吳書』の完本が存在していたと考えられ、『世說』注所引『吳書』は韋昭『吳書』の完本を参照したものと思われる。因みに『世說』注所引『吳志』は3條あり、細かい文字の異同はあるが全て現行『吳志』と同内容のものである（『後漢書』章懷太子注及びその他の類書については〔表3〕『後漢書』章懷太子注及び類書所引『吳書』佚文目録を参照されたい）。

裴注所引『吳書』と内容が異なるものについて見ると、まず

吳書曰く：「遜字は伯言，吳郡の人なり，世々冠族爲り。初め海昌令を領し，神君と號せられ，丞相に累遷す。」（『世說新語』方正第五）

がある。これを『吳志』陸遜傳本文と比較すると、

陸遜字は伯言，吳郡吳の人なり。本名は議，世江東の大族なり。（中略）孫權將軍と爲り，遜は年二十一，始めて幕府に仕へ，東西曹令史を歴し，出でて海昌屯田都尉と爲り，並びに縣の事を領す。（中略）赤烏七年，顧雍に代わりて丞相と爲る。

とあり、内容は類似しているが相違点もいくつか指摘できる。最も明らかな違いとしては『世說』注所引『吳書』にある「號神君」が『吳志』にはないことである。この理由としては、陳壽『三國志』の傾向として指摘されている「事實への謹慎」<sup>8)</sup>のために、また舊敵國であった吳の宰相を持ち上げることに對する晉王朝への遠慮のために削除したと考えられる。

また、その他の違いとしては『吳志』にある「本名議」が『吳書』佚文にはないことや、細かく見ると「世爲冠族」が「世江東大族」に、「初領海昌令」が「始仕幕府，歷東西曹令史，出爲海昌屯田都尉，並領縣事」となっている。

ただ、全體としては類似點が多く、基本的には陳壽『吳志』が韋昭『吳書』の内容を採録していたと考えて問題ないと思われる。

次に

吳書曰く：「瑾亂を避け江を渡り，大皇帝取りて長史と爲し，遣はして蜀に使ひす，但だ弟亮と公に會ひ相見ゆるも，反りて私に面する無し。而して又容貌思度有り。時人其の弘量に服す。」（『世說新語』品藻第九）

が擧げられるが，これを『吳志』諸葛瑾傳本文と比較すると，

諸葛瑾字は子瑜，琅邪陽都の人なり。漢の末亂を江東に避く。（中略）後權の長史と爲り，中司馬に轉ず。建安二十年，權瑾を遣はして蜀に使ひし好を劉備に通ず，其の弟亮と俱に公に會ひ相見ゆるも，退きて私に面する無し。（中略）瑾の人と爲りは容貌思度有り，時にあひて其の弘雅に服す。とあり，非常によく類似している。これを見ると，陳壽『吳志』が韋昭『吳書』の内容をほぼそのまま採録したものであることがよく理解できる。

『後漢書』章懷太子注（以下『後漢書』注と略す）所引『吳書』は裴注所引『吳書』と同内容のものが4條，異なっているものが2條ある。裴注所引『吳書』と内容が異なっているものは

吳書曰く：忠字は嘉謀，朱雋と共に曹陽において李傕に敗るる也。

（『後漢書』卷四十五周榮傳附周忠傳）

と

吳書の韓馥の袁術に與へたる書に曰く：「凶代郡に出づ。」

（『後漢書』志卷八五行六）

の二つである。これらは『三國志』本文とも重複していない。

『後漢書』注所引『吳志』は7條あるが，全て現行『吳志』と比較すると文字の異同・省略はあるものの裴注からの混入はない。

『北堂書鈔』所引『吳書』佚文には裴注所引『吳書』と同内容のものが17條、異なっているものが8條あり、あわせても同書所引『吳志』(56條)と比べると約三分の一となっている。裴注所引『吳書』と異なっているものとしては

吳書：孟宗豫章守と爲り，民其の德に感ず，是の時子生まれる故に名づけて云ふ。  
(『北堂書鈔』卷三十五政術部德化)

吳書曰く<sup>9)</sup>：陸遜，曹休を破る。上羣僚と大いに會し<sup>10)</sup>，酒酣にして，遜に命じて對舞せしめ<sup>11)</sup>，着る所の鼃子裘を解き之を賜ふ<sup>12)</sup>。

(『北堂書鈔』卷一百二十九衣冠部三 裘，『藝文類聚』卷四十三樂部 舞，  
『事類賦』卷十一樂部 舞)

吳書云はく：孫權周瑜に衣を寒暑ごとに皆百領賜ふに，諸將及ぶ者有るなし。  
(『北堂書鈔』卷一百二十九衣冠部三 衣)

吳書曰く：陸遜曹休を破り，上脱ぐ所の御金校帶を以て遜に賜ふ。

(『北堂書鈔』卷一百二十九衣冠部三 絡帶，『藝文類聚』卷六十七衣冠部 帶)

吳書：全琮年高云云(賜以復杖)。(『北堂書鈔』卷一百三十三儀飾部四 杖)

吳書曰：陸遜曹休を破り，當に西陵に還らんとし，公卿並びて會し，祖道を設く。上御船を賜ひ，繪綵を以て之を飾る。

(『北堂書鈔』卷一百三十七舟部舟總篇，『藝文類聚』卷七十一舟車部 舟，  
『太平御覽』卷七七〇舟部三 舫・卷八一四布帛部一 綵)

吳書曰く：洪規郡を罷め會稽歸るも資糧無し，又人の知るを欲せず，乃ち土を載せるも反す。  
(『北堂書鈔』卷一百三十七舟部舟總篇)

吳書曰く：袁術壽春に在りて、穀石百餘萬、金錢を載せて市に之き糶を求むるに、市に米無く錢を棄てて去る。百姓飢窮し、桑椹蝗蟲をもって乾飯と爲す。

(『北堂書鈔』卷一百四十四酒食部 飯篇、『藝文類聚』卷一百災異部 蝗)  
が挙げられる。特に卷一百三十七の文章は類似した文章が他に全くないので興味深い。

ただ、全體としては裴注所引『吳書』と同内容が多数を占めることや唐代に『吳書』の完本が残っていたかどうかかわからないことから、主に裴注所引『吳書』を参照していたと考えるほうが自然ではないかと考えられる。ただ、一部異なっているものがあることから、虞世南は完本ではなかったとしても『吳書』を参照していたか『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していたのであろう。

『北堂書鈔』所引『吳志』の中には、『吳志』と稱しながら他書から引用されたものがあり<sup>13)</sup>、また『吳志』裴注所引の史籍の文章を『吳志』と稱していたりする。このことから『北堂書鈔』も裴注のある『三國志』を参照していることがわかる。

『藝文類聚』所引『吳書』佚文には裴注所引『吳書』と同内容のものが9條、異なっているものが5條あるが、『吳志』(48條)に比べると引用数はかなり少ない。裴注所引『吳書』と内容が異なっている5條は『北堂書鈔』卷一百二十九と類似している文章や同卷一百四十四と同一の文章以外に

吳書陸凱奏して曰く：臣おもへらく西陵を以て國の關首とし、宜しく其の備へを重くすべし。備へ重ければ則ち敵敢へて輕んぜず、備へ輕ければ則ち敵の侮る所と爲る。

(『藝文類聚』卷六地部 關)

吳書曰く：陸遜曹休を破り、帝御金帶を脱ぎ以て遜に賜ふ、又親しく以て之を帶す。

(『藝文類聚』卷六十七衣冠部 帶、『北堂書鈔』卷一百二十九衣冠部三 絡帶)

呉書曰く：陸遜曹休を破り、當に西陵に還らんとするに、公卿並會し、遜の爲に祖道す。上遜に御船一舫を賜ひ、繪綵舟梁たり。

（『藝文類聚』卷七十一舟車部 舟）

が挙げられる。内容を見ると、裴注所引『呉書』だけではなく陳壽『三國志』とも全く重ならない（陳壽『三國志』に記載されていない）ものであることがわかる。このことから考えると、韋昭『呉書』は陳壽『三國志』呉書と内容がほとんど同じであったため、内容が重なる部分は『呉志』のほうで引用され、重ならない部分のみ韋昭『呉書』が引用されたのではないかと考えられる。

しかし、全體としては裴注所引『呉書』と同内容が多數を占めることや唐代に『呉書』の完本が残っていたかどうかかわからないことから、主に裴注所引『呉書』を参照していたと考えるほうが自然ではないかと考えられる。とはいっても、一部異なっているものがあることから、歐陽詢は部分的に残った『呉書』を参照していたか『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していたと考えられる。

『藝文類聚』所引『呉志』であるが、ほとんどが現行『呉志』と比較すると文字の異同・省略はあるものの混入はない。しかし、中には

呉志曰く：賀齊新都郡守と爲る、權出でて祖道し、樂を作り象を舞はす。  
權齊に謂ひて曰く：「今天下定まり、中國に都し、殊俗をして珍を貢がしめ、百獸を率ひて舞はしむるときは、君に非ずして誰か？」

（『藝文類聚』卷九十五 獸部下 象）

という文章がある。現行『呉志』卷六十賀齊傳を見ると

齊復た表し歙を分ちて新定、黎陽、休陽、并、黟、歙の凡そ六縣と爲さんとす。權遂に割りて新都郡と爲し、齊太守と爲る、府を始新に立て、偏將軍を加ふ。十六年、呉郡餘杭の民郎稚、宗を合わせ賊起こり、復た數千人、齊出でて之を討ち、即ち復た稚を破る、表言して餘杭を分かち臨水縣と爲す。命を被り所在に詣り、當に郡に還るべきに及んで、權出でて祖道し、樂を作り象を舞はしめん。

とあり、この文章についての裴注所引『吳書』には

吳書曰く：權齊に謂ひて曰く：「今天下定まり、中國に都し、殊俗をして珍しきを貢がしめ、狡獸を卒に舞はしむるときは、君に非ずして誰か？」（後略）。

とあって、『藝文類聚』所引『吳志』と比較すると、波線の部分の内容が共通している。このように、『藝文類聚』所引『吳志』には『吳志』本文と裴注所引の『吳書』の史籍の文章の混合文も見られることから、『藝文類聚』所引『吳志』は裴注のついたものを参照していることがわかる。

『類林』は『新唐書』藝文志にも記述があるように<sup>14)</sup>、唐代の宰相・于志寧の子の于立政により7世紀半ばに完成されたと考えられる類書である。于立政『類林』の原本は失われているが、金代の王朋壽が編纂した『増廣分門類林雜説』や西夏本『類林』などから原本を復原しようとした史金波・黄振華・聶鴻音諸氏の労作があり<sup>15)</sup>、ここではその中にある『類林』復原本に依據しつつ『吳書』佚文を見ていきたい。『類林』復原本には裴注所引『吳書』と同内容のものが1條ある。

鄭泉字は文淵、陳留の人なり。之を嘆ずる毎に曰く：「三百斛酒を得て、我が船中に満たし、又甘餚を頭尾に置く、加ふるに金卮を以てし、便ち樂と爲さん。」死に臨む日、妻に謂ひて曰く：「我を陶家の側に殯せ、百歳の後化して土と成り、水とけて酒と爲り、誠に心を獲ん。」吳主孫權時大中大夫と爲る。『吳書』に出づ。 (嗜酒篇第三十六)

『吳志』卷四十七吳主傳裴注所引『吳書』の鄭泉に関する佚文を見ると、

吳書曰く：鄭泉字は文淵、陳郡の人なり。博學にして奇志有るも、性酒を嗜む、其の閑居する毎に曰く：「願はくは美酒を得て五百斛船を満たし、以て四時の甘脆を兩頭に置き、之を反覆没飲し、憊れては即ち住みて肴膳を啖す。酒升斗の減る有りて、隨ひて即ち之を益さば、亦快ならずや！」……泉卒するに臨み、同類に謂ひて曰く：「必ず我を陶家の側に葬れ、庶はくは百歳の後化して土と成りて、幸にして取られて酒壺と爲らば、實に

我が心を獲んや。

とある。波線部が共通する部分と考えられるが、一見して文字・内容の異同が激しいことがわかる。于立政は『呉志』裴注を参照したか、部分であったとしても『呉書』を参照していた、または『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していたという可能性が考えられる。が、佚文がこの1條しかないことや『類林』の原本が存在しないことから断言することは難しい。

『文選』李善注所引『呉書』佚文には裴注所引『呉書』と同内容のものが6條、異なっているものが1條ある。また、管見の限り『文選』五臣注には『呉書』佚文が存在しない。

『文選』李善注所引『呉書』佚文で裴注所引『呉書』と内容が異なるものは善曰く：呉書曰く：孫策初め魏武と俱に漢に事ふるも、薨ず。周瑜、魯肅權を諫めて曰く：「將軍父兄の餘資を承け、六郡の衆を兼ね、兵精く糧多し、何ぞ區區として人に制せらるを受けんや！」權遂に江東に據り、西は蜀漢を連ね、劉備と和親す。故に書を作りて權に與へ、來るを得て同じく漢に事ふるを望むなり。　（『文選』卷四十二書中「爲曹公作書與孫權」）

である。『呉志』本文中には内容の類似しているものではなく、部分的に類似しているものとしては『呉志』卷五十四周瑜傳裴注所引『江表傳』の

江表傳曰く：……瑜曰く：「……今將軍父兄の餘資を承け、六郡の衆を兼ね、兵精く糧多し、……質一たび入らば、曹氏に與へて相首尾せざるを得ず、與に相首尾し、則ち命じて召さるれば往かざるを得ず、便ち人に制せらるるなり。（後略）」

を挙げることができる（傍線部が類似する部分）。このように見ると、裴注所引『呉書』だけではなく陳壽『三國志』本文とも全く重ならない（陳壽『三國志』に記載されていない）ものであることがわかる（したがって、『三國志』本文と上記の裴注所引『江表傳』が混ざった文章を『呉書』と稱した可能性も低くなる）。〔表3〕の内容も踏まえて考えると、韋昭『呉書』は陳壽『三國志』呉書と内容がほとんど同じであったため、内容が重なる部分は『呉志』のほう引用され、重な



らない部分のみ韋昭『吳書』が引用されたのではないかと考えられる。

以上から、全體としては裴注所引『吳書』と同内容が多數を占めることや唐代に『吳書』の完本が残っていたかどうか分からないことから、主に裴注所引『吳書』を参照していたと考えるほうが自然ではないかと考えられる。ただ、一部異なっているものがあることから、李善らが部分であったとしても『吳書』を参照していたか『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していた可能性もある。

『初學記』所引『吳書』佚文には裴注所引『吳書』と同内容のものが3條、異なるものが1條、部分的に異なるものが1條ある。

裴注所引『吳書』と内容が異なるものは

韋昭吳書曰く：呂蒙病發し、孫權時に公安に在り、迎へて内殿に置く、夜寐る能はず。病中瘳る有らば、爲めに敕令を下す。

(『初學記』卷二十政理部敕)

である。『吳志』呂蒙傳を見ると、

封爵未だ下らざるに、蒙疾發するに會ひぬ、權時に公安に在り、迎へて内殿に置く、……夜寐る能はず。病中瘳れば、爲めに敕令を下し、羣臣畢く賀す。

とあり(傍線部は上記佚文と共通する部分)、非常によく類似している。これによると、『吳志』が『吳書』の内容を襲っていることがよく理解できる。

ただ、『初學記』所引『吳志』は32條あるが、その中には

吳志曰く：黃武五年、丹楊、會稽、吳郡の山寇に攻沒せる諸縣、乃ち三郡の要害の地を分かちて東安郡を置き、富春に居す<sup>16)</sup>。

(『初學記』卷八州郡部江南道)

のように『吳志』本文と裴注所引の『吳書』以外の史籍の文章の混合文も見られることから、『初學記』所引『吳志』は裴注のついたものを参照していることがわかる。このことからすると、先述の『初學記』卷二十所引『吳書』も、『吳志』を誤って『吳書』として引用した可能性も否定しきれず、注意が必要

である。

以上のようなことから、全體としては裴注所引『呉書』と同内容が多数を占めることや唐代に『呉書』の完本が残っていたかどうかわからないことから、主に裴注所引『呉書』を参照していたと考えるほうが自然ではないかと考えられる。ただ、一部異なっているものがあることから、徐堅らが部分であったとしても『呉書』を参照していたか『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していたと考えられる。

『太平御覽』所引『呉書』佚文には裴注所引『呉書』と同内容のものが38條(そのうち『呉志』本文と裴注所引『呉書』の混合文が1條)、異なるものが23條(『太平御覽』で初出となる文章が6條、『呉志』本文と同内容の文章が5條〔重複一つを含む〕、『呉志』と裴注所引の他の史籍の混合文が2條、裴注所引の『呉書』と他の史籍の混合文が1條、『呉書』以外の裴注所引史籍と同内容のものが2條)ある(〔表2〕『太平御覽』所引『呉書』佚文目録を参照されたい)。

他の典籍に比べて裴注所引『呉書』とは内容が異なるものも多く(23條)、特に初出となるのが、

呉書曰く：孫皓牛渚を以て督と爲し、何植を以て使と爲して晉軍を禦がしむ。當塗に牛渚山有り。 (『太平御覽』卷一七〇州郡部一六 宣州)

呉書曰く：賀齊上に従ひて合肥を討ちし時、城中戦に出て、徐盛牙を失ひ、齊別れて拒ぎ撃ち、盛の失ふ所の牙を得る。

(『太平御覽』卷三三九兵部七〇 牙)

呉書曰く：趙咨魏に使ひするに、魏人曰く：「聞くならく江東に蒭有り、菜を蹄して作りし若きを食と爲す。」咨曰く：「當に倉を得て、鱗を以て羹を作る。」 (『太平御覽』卷九七六菜部一 菜)

呉書曰く：徐盛曹休と戦ひ、賊茅草を積み焚盛せんと欲す、盛んに船を焼

きて去る、賊一も得る所無し。(『太平御覽』卷九九六百卉部三 茅)  
 の6條である。これらは裴注所引『吳書』だけではなく陳壽『三國志』とも全く重ならない(陳壽『三國志』に記載されていない)ものである。全體としては裴注所引『吳書』と同内容が半数を超えることや後述するように北宋期には『吳書』の完本は残っていなかった可能性が高いことから、主に裴注所引『吳書』を参照していたと考えるほうが自然であろう。とはいっても、異なっているものもあることから、完本ではなかったとしても『吳書』を参照している可能性や『修文殿御覽』などの現在残っていない類書を参照していた可能性が高い。

加えて、

吳書曰く：壬申、王濬皓の降を受けて、縛を解き櫬を焚き、延請して相見ゆ。晉陽秋曰く：濬呉を平らげ、濬其の圖籍を收むるに、州四、郡三十三、縣三百二十三、戸五十二萬三千、男女口二百三十萬、後宮五千餘人を領す<sup>17)</sup>。  
 (『太平御覽』卷三二四兵部五五 降)

吳書曰く：諸葛恪字は元遜、瑾の長子也。少くして名を知られ、鬚眉少なく、折頰廣額たり<sup>18)</sup>。  
 (『太平御覽』卷三六七人事部八 類)

のように「吳書曰～」とあるにもかかわらず『吳志』と裴注所引の他の史籍が混ざった文章が存在している場合がある。河野六郎研究代表「三國志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究」では『太平御覽』に引用されている『魏志』の中には裴注の文章を加えて『魏志』の本文として引用している場合があることが指摘されており<sup>19)</sup>、このことは『吳書』でも同様である。したがって、『太平御覽』所引『吳書』佚文については取り扱いには注意が必要である。また、

吳書曰く：薛綜上疏して曰く：交州刺史米符、多く郷人虞褒、劉彦の徒を以て分かちて長吏と作し、百姓を侵虐し、疆く民に賦す、黄魚一枚稻一斛を收む、百姓怨みて叛き、山賊並起す。

(『太平御覽』卷四九二人事部一三二 貪)

呉書曰く：嘉禾五年春，大錢を鑄る，一は五百に當る。詔して吏民をして銅を輸さしめ，銅を計りて直を卑ふ。盜鑄の科を設く。

（『太平御覽』卷八三五資産部一五 錢上）

のように「呉書曰～」とある文章で『呉志』と同内容の場合，本當に『呉書』にも存在していた可能性と，『呉志』にしか存在しなかった可能性を考慮して取り扱わなければならない（先に引用した二つの文章は，『呉書』にも存在していたと考えて問題ないと考えられる）。

『太平御覽』所引『呉志』は管見の限り438條ある。これらの中には，

呉志曰く：天璽元年，鄱陽郡歷陵山石文理字を成すと言ふ，巫石印神三郎有りと云ふ，皓使を遣はし，大牢を以て祭り并びに印綬をして三郎を拜して王と爲す。

（『太平御覽』卷四八 石印山）

呉志曰く：孫桓字は叔武，儀容端正，器懷聰朗，博學強記，論議應對を能くす，權常に稱して宗室の顔淵と爲し，擢りて武衛都尉と爲す。從ひて關羽を華容に討ち，羽の餘黨を誘ひ，五千人を得て，牛馬器械甚だ衆し。

（『太平御覽』卷二四一 都尉）

のように，やはり『呉志』本文と裴注所引史籍との混合文も見られる<sup>20)</sup>ことから，『太平御覽』所引『呉志』は裴注のついたものを参照していることがわかる。

『事類賦』注所引『呉書』佚文には裴注所引『呉書』と同内容のものが3條，異なっているものが1條，『呉志』本文の文章と同内容のものが1條，『呉志』と裴注所引『呉書』が混ざっているものが1條ある。

裴注所引『呉書』と内容の異なっているものは『北堂書鈔』卷一百二十九と同内容である。『呉志』本文の文章と同内容のものは

呉書曰く：諸葛恪將と爲る。蜀使至る，上使に謂ひて曰く：「元遜將と爲る，君蜀に還り，丞相に報じ，爲めに嘉馬を致す可し。」恪起ちて陳謝す，上曰く：「卿未だ馬を得ざるに，何爲れぞ謝す？」對へて曰く：「夫れ蜀は

陛下の外廐、今詔有り、臣必ず得るなり、是れを以て謝するなり。」

(卷二十一獸部 馬)

である。『吳志』卷六十四諸葛恪傳には

諸葛恪字は元遜、瑾の長子なり。(中略)後蜀使至りて、羣臣並會す、權使に謂ひて曰く：「此の諸葛恪雅より騎乘を好む、還りて丞相に告げ、爲めに好馬を致せ。」恪因りて下り謝す、權曰く：「馬未だ至らざるに謝するは何ぞ？」恪對へて曰く：「夫れ蜀は陛下の外廐、今恩詔有り、馬必ず至らん、安んぞ敢へて謝せざらんや？」恪の才捷、皆此の類なり。

とあり、内容が類似している。また、『吳志』と裴注所引『吳書』の混合文としては

吳書曰く：賀齊新都太守と爲り、孫權祖道に出て、樂を作し象を舞はしむ。權齊に謂ひて曰く：「今天下定まり、殊俗をして珍を貢がしめ、狡獸を率ひ舞わしむるときは、君に非ずして誰ぞや？」(卷二十獸部 象)

が擧げられる。『三國志』卷六十賀齊傳本文には

權遂に割きて新都郡と爲し、齊太守と爲る、(中略)權祖道に出て、樂を作し象を舞はしめん。

とあり、この本文に附せられた裴注所引『吳書』には

吳書曰く：權齊に謂ひて曰く：「今天下定まり、中國に都し、殊俗をして珍しきを貢がしめ、狡獸率ひ舞わしむるときは、君に非ずして誰か？」齊曰く：「殿下神武を以て期に應じ、王業を廓開す、臣幸ひに際會に遭ひ、風塵の下に驅馳し、末行を佐助し、鷹犬の用を效すを得るは、臣の願ひなり。殊俗をして珍しきを貢がしめ、狡獸を率ひ舞わしむるごとく、宜しく聖德在るべくは、臣の能くする所に非ず。」

とある。

以上のような佚文を一見すると、『吳志』が『吳書』の内容を襲ったことの證左のように見受けられる。しかし、後述するように『事類賦』が完成した北宋期以降に『吳書』が残っていたと考えにくいことから、主に裴注所引『吳書』を参照していたと考えるほうが自然であろう。つまり、『吳志』と裴注所

引『呉書』の混合文と見られるものは、韋昭『呉書』本文からではなく、裴注の附されていた『呉志』を『呉書』として誤って引用している可能性が高いということである。ただ、現に裴注所引『呉書』と異なっているものがあることから、『修文殿御覽』などの現在残っていない類書などを参照していた可能性は否定できない。

### 〔三〕 佚文から見た韋昭『呉書』の性格

以上のような佚文集成の作成・整理の作業の上で理解できる『呉書』の性格について述べていきたい。

まず、陳氏も指摘しておられる<sup>21)</sup>が、『三國志』卷六十五韋曜傳の

又皓父和の爲に紀を作らんと欲す、曜執りて和の帝位に登らざるを以て、宜しく名づけて傳と爲すべしと。是くの如きは一に非ず、漸く責怒せらる。曜益ます憂懼し、自ら衰老を陳べて、侍、史二官を去るを求む、造る所の書を成さんと欲し、業に従ふを以て別に付する所有らんことを乞ふ、皓終に聽かず。時に疾病有り、醫藥監護し、之を持すること愈だ急なり。

という記載から、韋昭『呉書』は本紀・列傳の形式をとっていたことが確認できる。陳博氏はこの『三國志』卷六十五韋曜傳に加えて

又『北堂書鈔』卷六十九有“『呉書』武烈皇帝紀云‘張溫爲車騎將軍……’”一條、(後略)。

と述べ、『呉書』が紀傳體の正史である論據としておられるが、『北堂書鈔』を見てみると

呉書云はく：張溫車騎將軍と爲り、幽州刺史陶謙の三軍を請ひて、接遇甚だ厚し。呉書を案じて曰く：陶謙字は恭祖、父は故の餘姚長なり。謙少くして孤となり、始め不羈を以て縣中に聞ふ。年十四、猶ほ帛を綴りて幡と爲し、竹馬に乗りて戯れ、邑中の兒童皆之に隨ふ。故の蒼梧太守同縣の甘公出でて之に遇ひ、其の容貌を見て、異として之を呼び、輿に語り、甚だ悦びて、妻するに女を以てするを許す。甘夫人怒りて曰く：「陶家の兒敖

戯度無し、女を以て之に許すは如何？」公曰く：「彼奇表有り、長じて必ず大成せん。」遂に之を與ふ。紆の令に除せらる。郡太守張磐は、同郡の先輩、謙の父と友たり、謙之が爲めに屈するを恥づ。衆と城に還り、嘗て舞ひて謙に屬す。謙爲めに起たず、固く之を強う；舞ふに及びて、又轉ばず。磐曰く：「當に轉るべからざる耶？」曰く：「轉る可からず、轉るときは則ち人に勝たん。」

(『北堂書鈔』卷六十九設官部二十一公府舍人一百四十七)

とあって管見の限り武烈皇帝紀の記事とは思えない。したがってこの記事は『吳書』が紀傳體の正史である論據とはなりえないと考えている。

志について、陳博氏は侯康『補三國藝文志』の

『齊書』禮志序を考して云はく：「吳則ち太史令丁孚漢の事を拾遺す。」是れ丁氏『吳書』に禮志有るなり、韋昭之に因りて、亦當に志有るべし。」

という記載と姚振宗『三國藝文志』の

(前略) 此の説非なり、禮志に漢の事を拾遺すと謂ふは、丁孚『漢儀』の書を指すなり。

の説を比較し、志が存在していなかったとしている。現在の『吳書』佚文集成に志関連の文章が全くないことから考えても、陳博氏の判断は正しいと思われる。

『隋書』經籍志と『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志でそれぞれ『吳書』の卷数が違うことについて、陳氏は隋代まではなくなっていた完本が、社會が安定した唐代になって出現したために異なっているという見解を示されている。『隋書』・『舊唐書』・『新唐書』の記述をそのまま受け入れて矛盾がないように考えた見解であろうが、王沈『魏書』について見てみると、『隋書』經籍志では四十八卷、『舊唐書』經籍志では四十四卷、『新唐書』藝文志では四十七卷となっており、『隋書』に比べて(社會が安定しているはずの)『舊唐書』・『新唐書』では減少している。上記のようなことを踏まえた上で、現在佚文収集に基づく分析を行っているような状況であることも考慮すると、社會が安定したために完本がでてきたという可能性は否定できないにせよ、なかなか首肯し難い面が

あるだろう。また、『宋史』以降になると藝文志に韋昭『吳書』の名は見えなくなることから、五代以後に散逸してしまったものと思われる。

韋昭『吳書』の記述された年代の上限と下限についてであるが、陳博氏は上限を韋昭『吳書』武烈皇帝紀にあったと推定される孫堅の生誕の記事（永壽元年（155年））とし、下限は韋昭が入獄した鳳皇二年（273）前後としておられる。上限について、陳氏は陶謙の記事から順帝の時期の可能性も指摘されている。先に『三國志』裴注所引『吳書』の分析の際に引用した陶謙への哀辭が記載された『吳書』佚文がそれであるが、この記事から筆者は少なくとも陶謙の生年である永建六年（131）までさかのぼることが可能であると考えている<sup>22)</sup>。

韋昭『吳書』の性格を考える上で見逃すことのできない佚文として、以下のような文章が挙げられる。

吳書曰く：堅洛に入り、漢の宗廟を掃除し、祠るに太牢を以てす。堅城南甄官井上に軍す、旦に五色の氣有り、軍を擧げて驚き怪しみ、敢へて汲む有るなし。堅人をして井に入らしめ、漢の傳國璽を探り得たり、文曰く「命を天に受け、既に壽しくして永昌ならん」、方圖四寸、上紐に五龍交はりて、上一角缺けたり。初め、黃門張讓等亂を作し、天子を劫かして出奔し、左右分散して、璽を掌どる者以て井中に投ず。

これは『吳志』卷四十六孫破虜傳裴注所引『吳書』の文章であるが、これによると孫堅は傳國璽を得ていたことになる。裴松之はこの文章を引用した後で

臣松之以爲らく孫堅義を興す中に於ひて最も忠烈の稱有り、若し漢の神器を得るに潛匿して言はざるは、此れ陰かに異志を懷くと爲さん、豈に謂はるる所の忠臣ならんや？吳史以て國華と爲さんと欲して、堅の令徳を損ずるを知らず。如し其れ果たして然らば、以て子孫に傳ふるに、縦ひ六璽の數ふるに非ざるも、常人の要りて畜する所に非ず。孫皓の降るに、亦但だ六璽を送りて、傳國を寶藏するを得ざるなり。命を天に受けて、奚ぞ歸命の堂を取らん、若し喜が言の如くんば、則ち此の璽今尚ほ孫門に在らん。

匹夫璧を懷きて猶ほ罪有ると曰ふに、況んや斯くの物をや！

と述べている。裴松之も指摘しているように、韋昭らはこの記事が『吳書』に



載せることで、傳國璽が呉に伝わったことを「國華」としようとしたのであろう。つまり、漢を受け継ぐ國家としての呉國の正統性と黄巾の亂以降の混亂を收拾して將來呉國が全土を統一することを前提とした呉國の全國統一を正統と認める歴史觀を示そうとしたと考えられる。しかし、裴松之はこの記事を載せることで「漢の忠臣」として高く評價されていた孫堅の令名・美德を貶めていると判断している。

孫呉政權の形成期では、孫堅が漢の忠臣であったことに基盤をおいた「漢室匡輔」という理念が政權存立の大義名分であり、國是となったと考えられる<sup>23)</sup>。『吳志』卷五十三張紘傳裴注所引『吳書』にも

吳書曰く：權初め統を承けるに、春秋方に富めり、太夫人方外多難を以て、深く憂勞を懷き、しばしば優令辭謝有り、付屬するに輔助の義を以てす。紘輒ち牋を拜して答謝し、思惟補察す。異事ありて密かに計り、章表書記して四方と交結する有る毎に及び、常に紘と張昭をして草創撰作せしむ。紘破虜の董卓を破り走らせ漢室を扶持するの勳有り；討逆江外を平定し大業を建立せるを以て、宜しく紀頌有りて以て公義を昭らかにするべしとす。既に成り、權に呈す。權省讀悲感して曰く：「君眞に孤が家門閥閥を識るなり。」（後略）

とある。孫堅が傳國璽を得てそれを持ち続けていたという章昭『吳書』の記事は、このような政權初期の「漢室匡輔」の姿勢と矛盾する。しかし、章昭が『吳書』を編纂する際には、編纂時點での大義名分（「漢」を受け継いだ「呉」の正統性）が優先されたために傳國璽を得たと記載されたということだと考えられるが、今後更に検討の餘地があろう。

『吳志』に立傳されていない人物で『吳書』に立傳されていた人物として陳博氏は陶謙・趙咨・沈珩・鄭泉・馮熙・陳化・丁固・李肅等を擧げておられるが、さらにこれらに加えて董卓傳・劉虞傳・袁紹傳・袁術傳・張繡傳なども存在していた可能性がある。例えば劉虞については

吳書曰く：虞は、東海恭王の後なり。世の衰亂に遭ひ、又時主と疏遠にして、縣に仕へて戸曹吏と爲る。能く身を治め職に奉ずるを以て、召されて

郡吏と爲り、孝廉を以て郎と爲る。累遷して幽州刺史に至り、甘陵相に轉じて、甚だ東土戎狄の心を得たり。後疾を以て家に歸り、常に身を降して隱約し、邑黨州閭と樂を同じくし卹を共にし、有無を等齊し、名位を以て自ら殊にせず、郷曲咸く共に之を宗とす。時に郷曲訴訟する所有り、以て吏に詣らず、自ら虞に投じて之を平らぐ；虞情理を以て之が爲に論判し、皆大小敬ひ従ひて、以て恨みと爲さず。嘗て牛を失ふ者有り、骨體毛色、虞の牛と相似たり、因りて以て是れと爲し、虞便ち推して之を與ふ；後主自ら本牛を得て、乃ち還して罪を謝す。たまたま甘陵復び亂れ、吏民虞の治行を思ひ、復た以て甘陵相と爲り、甘陵大いに治まる。徵せられて尚書令、光祿勳を拜す、公族にして禮有るを以て、更めて宗正と爲る。

（『三國志』卷八二公孫陶四張傳）

とあるが、これは韋昭『吳書』に劉虞傳として存在していた文章ではないかと思われる。本來韋昭『吳書』の中では立傳する必然性はないように見える陶謙や董卓・劉虞・袁紹・袁術・張繡について傳が存在するのは、先述したように孫堅以來の吳國の成立過程を描く中で漢を受け繼ぐ國家としての吳國の正統性と黃巾の亂以降の混亂を收拾して將來吳國が全土を統一することを前提とした豫定調和的な歴史觀を示そうとしたためではないかと考えられる。

『三國志』卷六十五韋曜傳に記載されている孫皓の父・孫和の韋昭『吳書』における扱いの問題について、王仲殊氏は韋昭『吳書』に文帝紀が存在していたとしている<sup>24)</sup>。すなわち、王氏は嘉興元年鏡の「嘉興」という年號にからむ『吳志』吳主傳の

五年春正月、子の和を立てて太子と爲す。大赦す。禾興を改めて嘉興と爲す。

と『宋書』卷三十五州郡志の

嘉興令、此の地もと長水と名づく、秦改めて由拳と曰う。吳孫權の黃龍三年、由拳縣に嘉禾生ず、改めて禾興と曰う。孫皓の父和と名づく、又名を改めて嘉興と曰う。

の二つの記事の矛盾に對して、『宋書』の記事は禾興縣を嘉興縣に改めたとい

うことではなく、年號を嘉禾から嘉興に改めたという内容だと解釋し、その年號變更は沈約の時代には完本が残っていた韋昭『吳書』の文帝紀に記載されていたとし、嘉禾六年(237)を嘉興元年に追改していたと推定している。

これに對して菊池大氏はこの王氏の説を再検討し、禾興縣は『吳志』吳主傳にあるように孫和が太子となったときに諱を避けて嘉興縣と改められ、孫和が太子を廢されたときに元の禾興縣に戻り、孫皓が父である孫和に「文帝」と追諡した元興元年に再び(『宋書』州郡志にあるように)嘉興縣と改められたと推定されている<sup>25)</sup>。したがって、『宋書』州郡志の記事を年號變更の記事と解釋する必要もなく、縣名變更の記事であるとされた。そのため、菊池氏は王氏の説では言及されていた韋昭『吳書』文帝紀に関しては指摘されていない。

また、『史通』卷二本紀には

夫れ位は北面に終わり、一概人臣なれば、儻え大號を追加せらるるも、止だ傳に入れて限る。是を以て弘嗣の吳史は、孫和を紀さず。

とあり、劉知幾によると『吳書』では孫和は本紀ではなく列傳に配されていたことがわかる。

因みに孫和に關する韋昭『吳書』佚文としては、『太平御覽』卷一五一皇親部一七諸王下の

吳書曰く：南陽王和字は子孝，譴せられて，長沙に之き，行きて蕪湖を過ぐ，鵲有りて帆檣に巢づくる，故の官僚之を聞きて皆憂慘して以爲らく，檣，久安の象に非ず。或ひは言ふ鵲巢の詩に「行を積み功を累て以て爵位を致す」の言有り，今王至德茂行にして，當に國を後にすべし，儻ひは神靈此れを以て人意に告寤するか？

を擧げることができる。この『太平御覽』の文章は『三國志』卷五十九孫和傳裴注所引『吳書』の

吳書曰く：和長沙に之き，行きて蕪湖を過ぐるに，鵲有りて帆檣に巢づくる，故の官僚之を聞き皆憂慘して以爲らく檣末傾危にして，久安の象に非ず。或ひは言ふ鵲巢の詩に「行を積み功を累ねて以て爵位を致す」の言有り，今王至德茂行にして，復た國土を受く，儻ひは神靈此れを以て人意に

告寤するか？

と類似している。先述のように、『太平御覧』に引用されている『魏志』の中には裴注の文章を加えて『魏志』の本文として引用している場合があることが指摘されており、筆者も『太平御覧』所引『魏志』に王沈『魏書』が混入している場合にはことごとく裴注所引『魏書』であることを指摘したことがある<sup>26)</sup>が、このことから類推すると『太平御覧』卷一五一所引『呉書』は『呉志』孫和傳本文と同裴注所引『呉書』の混合文の可能性も考えられる。しかし、『呉志』孫和傳本文を見ると

孫和字は子孝，慮の弟なり。……太元二年正月，和を封じて南陽王と爲し，之を長沙に遣わす。

とあり，嚴密に比較すると文章が異なっていることから、『太平御覧』卷一五一所引『呉書』は『呉志』孫和傳裴注所引韋昭『呉書』からではなく，韋昭『呉書』もしくは他の史籍・類書に引用された韋昭『呉書』などから引用されたと考えられる。

以上のようなことから，韋昭『呉書』において孫和は文帝として紀に記載されたのではなく南陽王として傳に記載されたものと考えられる<sup>27)</sup>。

また，陳氏の指摘にもあるように、『呉志』は『呉書』の内容を削るだけでなく，篇目や内容を増補していることは間違いない。『呉志』にある韋昭没後の記事や『呉書』を編纂した華覈・薛瑩・韋昭らの傳は陳壽本人が増補したと考えられること，董昭・張昭・周昭が避諱されていないのは陳壽が典據とした三國時代の史書にもともと記されていたからであり陳壽本人が増補した韋昭については司馬昭の諱を避けて「韋曜傳」としたという見解にも矛盾がなく，筆者も妥当な見解だと考える。加えて，『呉志』が『呉書』の内容を襲ったという見解についても，首肯できる。『呉志』と『呉書』の内容が非常に異なっていたならば，『呉書』が散逸することがなかったであろうことも，この見解の傍證となるであろう。

ところで，陳氏は『陸士龍集』卷八『與平原書』に関して，以下の文章を引用されている。

雲再拜，誨欲定『吳書』，雲昔已商之兄，此不朽之事。……陳壽『吳志』有「魏賜九錫文」及「分天下文」，『吳書』不載。又有嚴陸諸君傳，今當寫送兄。

そして、陳壽『吳志』が韋昭『吳書』の記載を補いつつ編纂していたこと、韋昭『吳書』に嚴陸諸君傳があったことがわかるとしている。しかし、松本幸男氏は『與平原書』の該当部分について

雲再拜す，『吳書』を定せんと欲するを誨さる。雲昔已に之を兄に商りしも，此れ眞に不朽の事なり。……陳壽『吳書』に「魏の九錫を賜ふ文」及び「天下を分かつ文」有るも，『吳書』には載せざれ。又嚴陸諸君の傳有り，今當に寫し送るべし。

と引用されている。そして、ここにある「『吳書』不載」は「『吳書』には載せざれ」と訓讀しておられ、この『吳書』は韋昭『吳書』ではなく陸機が編纂しようとしていた『吳書』のことであり、「『吳書』不載」とは「陸機の『吳書』には（「魏賜九錫文」や「分天下文」のような）無内容な外交文書を記載する必要がない」という意味であると述べておられる<sup>28)</sup>。また、「嚴陸諸君傳」とは韋昭『吳書』の列傳の名稱ではなく陳壽の『吳志』にある嚴陵傳や陸績傳，陸瑁傳のことであるとも考えておられる<sup>29)</sup>。

「『吳書』不載」の部分の解釋については、松本氏が『與平原書』全體の内容を考慮された上でのものであることからすると、一定の説得力を有するであろう。しかし、所謂「魏賜九錫文」や「分天下文」が本當に無内容であったのかどうか<sup>30)</sup>、少なくとも陸雲がそれらが無内容と考えていたかどうかは『與平原書』からはわからない。加えて、「韋昭『吳書』」として「『吳書』は載せず」と讀んでも「韋昭『吳書』は記載していない」となって文章全體の意味としては問題ないと考えられることや實際に韋昭『吳書』佚文に「魏賜九錫文」・「分天下文」が存在しないことからすると、この部分の『吳書』については韋昭『吳書』である可能性も否定しきれないと考えている。

また、「嚴陸諸君傳」についてであるが、陳壽『吳志』のものか韋昭『吳書』のものかは斷定できないのではないだろうか。陳壽の『吳志』がかなりの部分

において韋昭『吳書』を典拠としていたことはほぼ間違いないことから考えると、陳壽の嚴峻傳・陸績傳・陸瑁傳のもととなったであろう韋昭『吳書』の傳である可能性は否定できない。以上の件については今後なお検討すべき課題ではないかと考えている。

#### 〔四〕 韋昭『吳書』と諸葛恪政權

先述の『吳志』卷四十六孫破虜傳裴注所引『吳書』に加えて韋昭『吳書』の性格を考える上で重要な文章が『三國志』卷四十七吳主傳裴注所引『志林』であるが、そこには

志林曰く：吳の創基，邵を首相と爲すも，史に其の傳無し，竊かに常に之を怪しむ。嘗て劉聲叔に問ふ。聲叔は博物の君子なり，云はく：「其の名位を推すに，自ら傳を立つべし。項峻，（吳孚）〔丁孚〕の時已に注記有り，此れ張惠如と能くせずと云ふ。後韋氏史を作すも蓋し惠如の黨にして，故に書かれず。」

とあり，韋昭が「張溫の派閥」に屬していたため，韋昭『吳書』には張溫と關係が良くなかった孫邵の傳が立てられなかったと指摘されている。

先に引用した『史通』卷十二古今正史・『三國志』卷五十三張嚴程闕薛傳にある『吳書』編纂の経緯についての文章の「季年」・「末年」を素直に受け止めれば，丁孚・項峻が『吳書』編纂を命じられたのは太元元年（251）か神鳳元年（252）ということになるが，韋昭らは孫權死後成立した諸葛恪政權によって編纂の命令を受けているので建興元年（252）から建興二年（253）に命ぜられたということになり，丁孚・項峻は1年ほどで「史才」がないとされてしまったことになる。彼らの傳や編纂途中であった彼らの『吳書』の佚文すらないので彼らに本当に「史才」がなかったのかどうかはよくわからないが，『志林』で指摘されていたように韋昭が「張溫の派閥」に屬していたため，韋昭『吳書』には吳の初代丞相の孫邵の傳を立てなかった<sup>31)</sup>という偏向があることや（先に引用した『玉海』卷四十六所引『中興書目』を見ると）韋昭『吳書』が丁孚・

項峻の『吳書』を受け継いで書かれていた可能性があることから考えると、彼らが編纂からはずされたのは「史才」以外の理由を考える方が自然であろう。そして、その理由としては（『志林』に依ると）丁孚・項峻が「張溫の派閥」に属していなかったため、と考えるのが順當なところということになる。

因みに孫邵に関して、渡邊義浩氏は『志林』の記事から「張昭を頂點とする孫呉「名士」社會において、自律的秩序を破って丞相とされた孫邵は、その記録から抹殺されたということか<sup>32)</sup>」と述べ、さらに『吳志』吳主傳裴注所引『吳錄』を引用して孫邵が張溫・暨豔（韋昭が属していた「派閥」の人々<sup>33)</sup>）から弾劾されて丞相を辞任しようとしたが孫權に拒まれたことを指摘し、これは「孫呉「名士」社會の自律的秩序に對して、君主の人事權が優越することを示すためである<sup>34)</sup>」としている。

しかし、孫權が孫邵の丞相辭任を認めなかった理由としては君主の人事權の優越を示すためと説明することができようが、渡邊氏の表現を見ても理解できるように、孫呉「名士」社會の自律的秩序を破って丞相とされたため、韋昭『吳書』において孫邵の傳が抹殺されたと言いきることができるか疑問である<sup>35)</sup>。『志林』の記事にあるように、單に反對派閥だったからであろう。

また、渡邊氏は諸葛恪政權を「名士」政權と位置づけておられるが、諸葛恪の政策（特に北伐）は必ずしも所謂「名士」層に支持されていなかったと考えられ、諸葛恪の北伐に對しては聶友だけでなく政權の中樞にいたであろう滕胤の反對意見<sup>36)</sup>がある。諸葛恪が「全土統一へ向けた行動」という建前としてだけではなく、蜀漢における諸葛亮を参考にして<sup>37)</sup>「北伐を主導することを通じて、軍事力を自己の規制下に」<sup>38)</sup>置こうとしたことについてはまず間違いないと筆者も考える。しかし、『吳志』卷六十四諸葛恪傳にある北伐論やそれに対する聶友や滕胤の反對意見を見ると、諸葛恪は時が経つごとに擴がっていく魏との國力差を考慮してあくまで「魏との對決姿勢を貫き統一を目指す」という吳國存立の大義名分の早期實現や自己の權力強化のために北伐を行ったのであって、「名士」政權を確立しようとし<sup>39)</sup>たのではないであろう<sup>40)</sup>。

諸葛恪の政策で問題となったのは、北伐だけではないようである。所謂二宮

の變で廢太子となっていた孫和に關しては、『吳志』卷五十九孫和傳に

四月、權薨ず、諸葛恪政を乗る。恪即ち和の妃張の舅なり。妃黃門陳遷をして建業に之かして中宮に上疏せしめ、并びに問を恪に致す。去るに臨み、恪遷に謂ひて曰く：「我が爲に妃に達せよ、期して當に他人に勝げしむべし」と。此の言頗る泄る。又恪都を徙す意有りて、武昌宮を治めしめ、民間或ひは和を迎へんと欲すると言ふ。恪誅せらるに及びて、孫峻此れに因りて和の璽綬を奪ひ、新都に徙す、又使者を遣はして死を賜ふ。

とあり、諸葛恪が孫亮を廢して孫和を擁立しようとしていたことやその傍證として諸葛恪が武昌に都を移す意思があったことが述べられている。これは重大な問題となったであろう。政權中枢の中には孫峻・呂據という元魯王派も存在していた<sup>41)</sup>し、孫和を擁立することは皇帝(孫亮)を廢することにもつながるので、元太子派の者たちや所謂「名士」とされる人々であつても諸手を舉げて歓迎する事態とはならなかったのではないかと考えられる。

このように見ると、諸葛恪政權は渡邊氏のいうような所謂「名士」政權だったとまでは言えないのではないかとと思われる。

加えて、渡邊氏は韋昭『吳書』の編纂目的に關連して、「諸葛恪政權は、韋曜〔韋昭〕らに『吳書』を編纂させ、「名士」の價值觀を後世にも明らかにしようとした<sup>42)</sup>」と述べておられる。しかし、上記のように見ると、諸葛恪が命じ韋昭が編纂を開始した際に所謂「名士」の價值觀を後世に明らかにすることに本當に主眼がおかれていたのであるか。やはり、何よりも吳國の正統性と將來吳國が全土を統一することを前提とした豫定調和的歴史觀を示そうとしているのではないか。孫邵の件についても渡邊氏の指摘するような側面はあるにせよ、「名士」の價值觀を明らかにするため」の記述を諸葛恪が韋昭『吳書』に對して期待していたかどうかとも疑問である。

さらに、先述のように陸機・陸雲が韋昭『吳書』・陳壽『吳志』の記述に不満を持ち、獨自に『吳書』を編纂しようとしていたことは、陸機・陸雲が「韋昭『吳書』は所謂「名士」の價值觀を必ずしも明らかにし得ていない」と判斷したということを表しているように思われる。



諸葛恪の政權掌握の背景には、孫權死後の政權に對する不安感解消のための舉國一致體制を築く必要性の認識があり、そのための彼個人の資質も政權掌握の重要な要因であつただろうが、それに加えて「諸葛」姓の持つシンボリックな意味があつたのではないだろうか。父は吳で大將軍となつて政權内で重要な役割を果たし、魏でも一族の諸葛誕がこの時期に鎮東將軍・都督揚州諸軍事となっている。さらに、なんといっても叔父は蜀漢で宰相として政權の中心にあつて北伐を實行し、敵國も含む當時の人々からも（少なくとも政治能力に関しては）評價の高かつた諸葛亮である<sup>43)</sup>。『吳志』卷四十七吳主傳にある所謂「分天下文」などに見える蜀漢と吳の間の同盟關係を考慮すると、蜀漢に對するアピールとしてはうってつけの人物ということになり、また魏に對しても諸葛誕をはじめとする人々に何かしらの影響を與えることができるという可能性をも考慮したと考えることもできる。このように考えると、諸葛恪の政權掌握の背景には「死せる諸葛一族（特に諸葛亮）の名聲」があるとも言えるだろう<sup>44)</sup>。

ちなみに、『吳志』に孫邵傳が存在しない理由として『廿二史札記』卷六には、

吳黃武四年、丞相孫邵卒し、顧雍を以て丞相と爲す。是れ邵は相爲りて雍の前に在るに、乃ち雍には傳有るも邵には傳無し。史林謂はく邵は張惠如と睦まじからず、史を作りたる者の韋曜は、乃ち惠如の黨なり、故に爲に傳を立てずして、壽の志も亦遂に之を遺す。然れば則ち壽の志傳を立つるは、悉く舊史を本とし、舊史無き所は、概して書かざるなり。

とあり、趙翼は陳壽が『三國志』を編纂し立傳するにあたって典據とした史籍を踏襲しており、典據とした史籍に傳が無い場合は概ね立傳しなかつたと指摘していて、これは『吳志』と韋昭『吳書』の關係のみならず、『魏志』と王沈『魏書』・魚豢『魏略』の關係を考慮しても正しい見解であろう。

## まとめ

韋昭『吳書』は全體で五十五卷ある紀傳體の史書であるが、志や表はなかつ

たと考えられる。佚文から見ると、後漢末（131年頃）から章昭の亡くなる273年前後まで記載がある。『呉書』編纂は、最初孫權治世の末年に太史令の丁孚と郎中の項峻が命じられたが、史才がないと考えられ不十分なものとされた。孫亮が即位し諸葛恪が政權を握ると、章昭をはじめ周昭・薛瑩・梁廣・華覈の五人が編纂を命じられたが、最後は章昭が一人で完成させたことになっている。章昭が罪を得た頃にはほとんどできあがっており、敘や贊ができていないという状態であった。

『三國志』裴注所引章昭『呉書』佚文は、陳壽『三國志』と比較すると内容がかぶらないものがほとんどである。すなわち、裴注所引『呉書』は陳壽『三國志』と内容が若干異なるもの、もしくは陳壽が削除したと思われる内容を補足するために引用されたものである。ただ、実際には陳壽が省いたものを補足のための引用がほとんどである。

裴注以外の史籍・典籍（『世說新語』劉孝標注、『後漢書』章懷太子注、『北堂書鈔』、『藝文類聚』、『文選』李善注、『初學記』、『太平御覽』、『事類賦』注）に引用された章昭『呉書』佚文は裴注所引『呉書』と同内容のものが多く、このことから主として『三國志』裴注所引『呉書』を参照していたと考えられる。章昭『呉書』の内容が『呉志』とほとんど同じであったため、内容が重なる部分は『呉志』のほうに引用され、重ならない部分のみ章昭『呉書』が引用されたためではないかと考えられる。ただし、少數とはいえ裴注所引『呉書』と内容が異なっている場合もあり、その場合は陳壽『三國志』とも内容がかぶらないものが大半を占める。このことからすると、史籍・典籍の編纂者たちが部分的なものであったとしても『呉書』を参照している可能性は否定できない。

『呉書』には孫堅が傳國璽を得たという記事があるが、これは章昭『呉書』が漢を受け継いだ國家としての呉國の正統性を主張し、黄巾の亂以降の混亂を收拾して將來呉國が全土を統一することを前提とする豫定調和的歴史觀を示そうとした記事だと考えられる。『呉志』には傳がないが『呉書』にはある人物として、趙咨・沈珩・鄭泉・馮熙・陳化・丁固・李肅などと共に劉虞・陶謙などの後漢時代の人物（董卓・袁紹・袁術なども可能性がある）を擧げることができ

るが、彼らを取り上げられた理由は、孫呉が後漢を受け継いで天下統一することを國是としていた點を意識して撰述がなされたためと思われる。また、韋昭『吳書』は孫呉の初代丞相である孫邵の傳を立てないという偏向を持った史書であり、權力者に遠慮しない「直書」の史書とは言い難い。

陳壽は韋昭『吳書』を『吳志』の主な典據としており、立傳する人物の基準についても『吳書』を踏襲している。ただ、完全に『吳書』のみに依據していたわけではなく、他の史書・史料によって『吳書』の記載を補っていた。編纂年代などから考えると、韋曜傳・華覈傳・薛瑩傳については『吳書』が未完成で專傳が存在しなかったもので、陳壽は獨自に編纂したと考えられる。

韋昭らは諸葛恪政權によって『吳書』編纂の命を受けたが、その目的は「名士」の價值觀を後世にも明らかにするためというよりは、先述のような吳國の正統性と吳國が全土を統一することを主張するものであったと考えるのが妥當である。ちなみに、諸葛恪を首班とする政權が成立した背景としては、所謂「名士」社會の成熟というよりも、彼本人の資質の問題や孫權死後の政權に対する不安感解消のための舉國一致體制を築く上での象徴的な存在という側面を考慮する必要があるだろう。

今後は『吳書』佚文の收録は別稿で行い、韋昭『吳書』の性格や『吳志』との關係についても考察を深めてゆきたいと考えている。

- 1) ちなみに『舊唐書』卷四十六經籍上乙部史錄僞史類には  
吳書五十五卷 韋昭撰。

とあり、『新唐書』卷五十八藝文二乙部史錄正史類には  
韋昭吳書五十五卷  
とある。

- 2) 他に小南一郎「解説―『吳書』、武人たちの世界」(ちくま學藝文庫『正史三國志』8 筑摩書房 1993年)が挙げられる。また、松本幸男「張勃吳錄考(附増補吳錄地理志)」[以下、松本論文1と略記]([學林]14・15 1990年)・「續張勃吳錄考(附 吳錄紀傳)」[以下、松本論文2と略記]([學林]16 1991年)・「四部叢刊本『與平原書』の錯簡問題と陸機の『吳書』撰定計畫」[以下、松本論文3と略記]([學林]23 1995年)・「陸雲『與平原書』譯注(一)～(二)」([學

林』25～26 1996・1997年)にも韋昭『吳書』に関する重要な指摘がある。ちなみに裴松之注を含む『三國志』については和譯本として今鷹真・井波律子・小南一郎〔譯〕『正史三國志』1～8 (ちくま學藝文庫 筑摩書房 1992～93年)がある。

- 3) 韋昭『漢書音義』については、李步嘉《韋昭〈漢書音義〉輯佚》(武漢大學出版社 1990年)などがある。なお、彼の編纂した音義に関する研究としては、「經典釋文所引音義攷(VI)―韋昭・呂忱・向秀・王元規・何胤・崔譔音について」(『漢學研究』6 1968年)などの研究がある。
- 4) 韋昭の「雲陽賦」は『太平御覽』卷一九四居處部二二 亭・卷九七一果部八 棹に一部が残っている。
- 5) 韋昭『春秋外傳國語』注に関しては、大野峻『新釋漢文大系 國語』第66卷(上)(明治書院 1975年)、古勝隆一「後漢魏晉注釋書の序文」(『東方學報 京都』73 2001年)、山田崇仁「『世本』と『國語』 韋昭注引系譜資料について―N-gram 統計解析法による分析―」(『立命館史學』22 2001年)、李步嘉「唐前《國語》舊注考述」(『文史』2001年第4輯)などの著述がある。
- 6) ちなみに『史通』の和譯本としては西脇常記『史通内篇』(東海大學古典叢書 東海大學出版會 1989年)、『史通外篇』(東海大學古典叢書 東海大學出版會 2002年)などがある。
- 7) 本田濟「陳壽の三國志について」(『東方學』23) 4頁  
總じて國志には劇的・小説的描寫が少い。これは裴注に引かれた同時代各史と比べれば瞭然である。これは彼の事實への謹慎ぶりを示すものであるが(吳志陸凱傳評參照)、反面物足らぬ感じもする。(中略)國志は同時代の作の過度に小説的なのに反撥する氣持があつたのであろうが、やや矯枉過正の嫌いがありはせぬか。
- 8) 本田濟「陳壽の三國志について」(『東方學』23) 4頁
- 9) 『藝文類聚』では「又曰」となっている。
- 10) 『藝文類聚』・『事類賦』注では「吳主」が「上」となっている。
- 11) 『事類賦』注では「上命遜舞」とあり、『藝文類聚』では「命遜舞」とある。
- 12) 『藝文類聚』・『事類賦』注では「解所著白鼯子裘賜之」とある。
- 13) 黃憲賢「隋鈔本《三國志・吳志》蠡測―《北堂書鈔》研究資料之二」(『魏晉南北朝隋唐史資料』第十八輯 武漢大學出版社 2001年)に指摘がある。
- 14) 『新唐書』卷五十九藝文三丙部子錄類書類には  
于立政『類林』十卷  
とある。ちなみに『類林』に関しては、川口久雄「敦煌本類林と我が國の文學」(『日本中國學會報』22 1970年)、同「敦煌本類林系類書と日本文學」(『金沢大學法文學部論集』文學篇18 1971年)、福田俊昭「敦煌本類林殘卷研究1～4」(『東洋研究所二十周年記念論文集』(『東洋研究』62～64) 1982年、『東洋研究』65・69・75 1983・1984・1985年)、同「類林考」(『東洋研究』84 1987年)な

どが擧げられる。

- 15) 史金波・黄振華・聶鴻音『類林研究』(寧夏人民出版社 1993年)。なお、この『類林研究』には西田龍雄氏の書評がある(『東洋學報』77—1・2 1995年)。

- 16) 『吳志』卷四十七吳主傳には

黄武(中略)五年(中略)三郡の惡地十縣を分かちて東安郡を置く、全琮を以て太守と爲し、山越を平討す。

とあり、その裴注に

吳錄曰く：郡治は富春なり。

とある。また、『吳志』卷六十全琮傳には

黄初(中略)七年、權皖に到り、琮をして輔國將軍陸遜と曹休を撃たしめ、之を石亭に破る。是の時丹楊、吳會の山民復た寇賊と爲り、屬縣を攻没す、權三郡の險地を分かちて東安郡と爲し、琮太守を領す。

とあり、その裴注には

吳錄曰く：琮の時富春に治す。

とある。因みに魏の黄初七年は吳の黄武五年である。いずれにせよ、『吳志』本文と裴注所引『吳錄』の混合文であることは間違いないであろう。

- 17) 『吳志』卷四十八孫皓傳には

壬申、王濬最も先に到り、是に於ひて皓の降を受けて、縛を解き櫬を焚き、延請して相見ゆ。

とあり、その裴注には

晉陽秋曰く：濬其の圖籍を收むるに、領州四、郡四十三、縣三百一十三、戸五十二萬三千、吏三萬二千、兵二十三萬、男女口二百三十萬、米穀二百八十萬斛、舟船五千餘艘、後宮五千餘人を領す。

とある。傍線部が共通しているが、郡や縣の數には異同がある。

- 18) 『吳志』卷六十四諸葛恪傳には

諸葛恪字は元遜、瑾の長子なり。少くして名を知らる。

とあり、その裴注には

吳錄曰く：恪長七尺六寸、鬚眉少なく、折頰廣額たりて、大口高聲たり。

とある。傍線部が共通しているが、「額」が『太平御覽』では「顙」となっている。

- 19) 河野六郎研究代表「三國志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究」(平成2・3・4年度科學研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書 東洋文庫 1993年)

- 20) 『太平御覽』卷四十八所引『吳志』について現行の『吳志』と比較すると、『吳志』卷四十八孫皓傳には

天璽元年、(中略)鄱陽郡言ふに歷陵山石文理字を成す、(後略)。

とあり、この部分の裴注所引『江表傳』には

江表傳曰く：……又云はく、石印の封發きて、天下當に太平なるべしと。下に祠屋有り、巫、石印の神三郎有りと言ふ。時に歷陽の長表を上して石印發くと言ふ。皓使を遣はし太牢を以て歷山を祭る。……重ねて使を遣はし、印綬を以て三郎を拜して王と爲す、(後略)。

とあり(波線部が共通部分)、内容が類似している。また、『太平御覽』卷二四一所引『吳志』について同様の比較をすると、『吳志』卷五十一孫桓傳には

孫桓字は叔武、河の子なり。(後略)

とあり、この部分の裴注所引『吳書』には

吳書曰く：河に四子有り。……次の桓、儀容端正、器懷聰明、博學強記、論議應對を能くす、權常に稱して宗室の顔淵と爲し、擢りて武衛都尉と爲す。從ひて關羽を華容に討ち、羽の餘黨を誘ひ、五千人を得て、牛馬器械甚だ衆し。

とあって、これも非常に類似している。

- 21) 松本論文2でも同様の指摘がある。
- 22) ただし、下限の時期については編纂時期に関する考察にとって必要であるが、上限についての考察は現段階ではそれほど重要であるとは思えない。
- 23) 渡邊義浩「孫吳政權の形成」(『大東文化大學漢文學會誌』38 1999年)〔以下、渡邊論文1と表記〕でも『吳志』卷四十六孫討逆傳裴注所引『吳歷』や本文に引用した『吳志』卷四十六卷五十三張紘傳裴注所引『吳書』の張紘の獻策などに基づいて、孫策以降曹魏が後漢を篡奪するまで「漢室匡輔」を國是としたことが指摘されており、石井仁「孫吳政權の成立をめぐって」(『東北大學東洋史論叢』6 1995年)、「孫吳軍制の再検討」(『中國中世史研究 續編』京都大學出版會 1995年)でも孫吳が天下統一を國是としていたことが指摘されている。
- 24) 嘉興元年鏡について扱った王氏の論文としては、王仲殊「黃龍元年鏡與嘉興元年鏡銘辭考釋—試論嘉興元年鏡的年代及其制作地」(『考古』1995年8期)・「湖北省鄂城市發現一面嘉興元年銘神獸鏡」(『考古』1999年11期)が挙げられる。
- 25) 菊池大「三國吳の「嘉興元年」鏡についての一試論」(『明大アジア史論集』7 2002年)
- 26) 拙稿「王沈『魏書』研究」(『創價大學大學院紀要』第二十集 1999年)  
なお、この指摘に関しては、河野六郎研究代表「三國志に記された東アジアの言語および民族に関する基礎的研究」(平成2・3・4年度科學研究費補助金一般研究(B)研究成果報告書 東洋文庫 1993年)所載「御覽・魏志卷數對照表」に多く依據している。
- 27) 松本論文2でも上記の『太平御覽』の文章を典據として同様の結論を導き出している。
- 28) 佐藤利行「陸機と吳書」(『中國學論集』3 1992年 安田女子大學中國研究會)では、

陳壽の「吳書」に「魏賜九錫文」有るも「分天下文」に及びては、「吳書」に

は載せず。又嚴・陸諸君の傳有り、今當に寫して送るべし。

としておられ、「吳書不載」の吳書を陳壽『吳志』と考えておられる。しかし、「吳書不載」の『吳書』を陳壽『吳志』として考えてそれに「分天下文」がないとされるならば、「不載分天下文」となるのではないかと考えており、佐藤氏の見解には賛同し難い。また、佐藤氏は『吳書』を作った人物として『與平原書』の記述から陳壽や陸機、彦長などを指摘しておられるが、韋昭に関しては全く指摘されていない。韋昭が陸機・陸雲と同時代の人物ではないからであろうか。

29) 松本論文3, 松本幸男「陸雲「與平原書」譯注(二)」(『學林』26 1997年)

30) 少なくとも「分天下文」に関しては、全く無内容であったかどうかは疑問である。

「分天下文」は『吳志』卷四十七吳主傳に

黃龍元年……六月、蜀衛尉陳震を遣はして權の位を踐むを慶ぶ。權乃ち天下を三分す、豫、青、徐、幽は吳に屬し、兗、冀、并、涼は蜀に屬す。其れ司州の土は、函谷關を以て界と爲し、爲に盟を造りて曰く：「……若し漢を害する有らば、則ち吳之を伐つ；若し吳を害する有らば、則ち漢之を伐つ。おのおの分土を守りて、相ひ侵犯すること無からん(後略)。」

という形で載せられているが、この文章の下線部について「吳及び蜀漢のいずれかの内部で混亂が発生し危機的状況となった場合、もう一方の國が併合することがあり得る」という解釋がなされていた可能性がある。『吳志』卷五十六朱然傳附朱績(施績)傳を見ると、

太平二年、驃騎將軍を拜す。孫綝政を乗りて、大臣疑貳す、績吳必ず擾亂して、中國讐に乗ずるを恐れ、乃ち密書して蜀と結び、并兼の慮を爲さしむ。蜀右將軍閭宇を遣はし兵五千を將いて、白帝の守を増して、以て績の後命を須つ。永安の初め、上大將軍、都護督に遷り、巴丘の上自り西陵にいたる。元興元年、就きて左大司馬を拜す。初め、然治の爲に喪を行ひ竟はり、本姓に復するを乞ふ、權許さず、績五鳳中を以て表して遷りて施氏と爲る、建衡二年卒す。

とあり、施績が太平二年(257)に蜀漢に對して孫綝政權によって混亂した吳を并兼するように密書を送っており、實際に蜀漢は閭宇を白帝城に派遣してそれを準備していたことがわかる。しかも、史料を見る限り、この件について施績には何の咎めもなかったようである。この件が「分天下文」に定められた下線部の内容の履行ということであれば、施績に咎めがないことも理解できる。以上のように考えると、「分天下文」が無内容であったとは言えなくなるであろう。なお、この見解については石井仁氏から直接ご教示戴いたことに負うところが大きいことを附記しておく。

31) ちなみに渡邊論文1注(八)ではこの『志林』が引用された後に、「『三國志』の基となった韋昭の『吳書』は、項竣・丁孚が手がけた孫吳の歴史書には存在していた孫邵の專傳を抹消するという偏向を有していたことが理解できるのである」と指摘されているが、この『志林』の文章を見る限り「注記」があったというこ

とはできても立傳されていたとまで言うことはできないのではないだろうか。この記事（「傳」ではなく「注記」があったという表現）から考えると、仮に項竣・丁孚によって立傳が計畫されていたとしても、一年から數年で編纂からはずされたことから、傳が作られていなかったと考える方が自然であろう。

- 32) 渡邊義浩「孫吳政權の展開」（『大東文化大學漢文學會誌』39 2000年）〔以下、渡邊論文2と表記〕
- 33) 張溫・暨豔に関しては、渡邊論文2の他に胡守爲「暨豔案試析」（『學術研究』1986—6 1986年）、田餘慶「暨豔案及相關問題—兼論孫吳政權的江東化」（『中國文化』第4期 1991年、『秦漢魏晉史探微』中華書局 1993年所収）にも指摘がある。胡氏は暨豔が「忘過記功」・「以功覆過」という選舉の本来の趣旨に違背したために怨憤の聲が上がったことが誅殺の原因であるとしている。田氏の論文では暨豔と山越との關係を重視し、張溫より暨豔を打倒することが暨豔誅殺・張溫幽閉事件の狙いだったとしているが、『志林』の記事にある「惠如之黨」という表現や（韋昭『吳書』を主な典據としていたであろう）『吳志』張溫傳の記事の配置（張溫傳の中に暨豔の記事がある）から類推すると俄には首肯しがたい。また、暨豔と山越の關係については『吳志』張溫傳所載の孫權の令以外に積極的な論據がないと思われ、可能性があるとはいえるものの斷言はし難いと考えられることから、事件の背景として重視することは難しいのではないだろうか。
- 34) 渡邊論文2
- 35) 渡邊論文2注(17)では『吳志』卷五十七陸瑁傳にある

時に尚書暨豔盛んに臧否を明らかにし、三署を差斷し、頗る人の闇昧の失を揚げて、以て其の譴を顯はす。瑁書を與へて曰く：「夫れ聖人は善を嘉し愚を矜み、過ちを忘れ功を記し、以て美化を成す。加ふるに今王業始めて建ち、將に大統を一にせんとし、此れ乃ち漢高祖を棄て録用するの時なり、若し善惡をして流れを異にし、汝穎月旦の評を貴ぶは、誠に以て俗を厲し教を明らかにする可し、然れども未だ行ひ易からざるを恐るるなり。宜しく遠くは仲尼の汎愛を模し、中は郭泰の弘濟に則り、近くは大道に益有るべきなり。」豔行ふ能はずして、卒に以て敗るるに致る。

から、張溫・暨豔の「名士」の自律的秩序に基づく人事そのものを否定しないまでも、時期尚早と考えていたと指摘されている。また、渡邊論文2本文でも、君主側から「名士」層への妥協があったため陸瑁や兄の陸遜などが張溫と同じ「吳の四姓」でありながら張溫らに對して批判的で同調しなかったとも述べておられる。このような見解を踏まえたとしても、少なくとも陸瑁らが「惠如之黨」とは言い難いことは確かであろう。加えて、陸瑁・陸遜らの渡邊氏が「名士」とされている人物が表立って孫邵を批判したという記載はなく、彼らが『吳書』編纂を命じる立場にあった場合には渡邊氏の言われる「名士」の自律的秩序に關係なく孫邵傳が作られた可能性は否定できない。さらに、韋昭に編纂を命じた諸葛恪が



「恵如之黨」であったかどうか、また孫邵についてどのように考えていたかははっきりとはわからず、諸葛恪が横死していなければどのようなになったかもわからない。このようなことからすると、章昭『呉書』で孫邵傳が抹殺された理由としては、孫邵が渡邊氏の言われる「名士」の自律的秩序に反したためというより、章昭が孫邵を敵對視する「恵如之黨」に属していたためと考えるほうが現時点では妥当ではないかと思われる。

36) 聶友の意見と諸葛恪の對應については『呉志』卷六十四諸葛恪傳に

丹楊太守聶友素より恪と善し、書して恪を諫めて曰く：「大行皇帝本より東關を過るの計有り、計未だ施行されず。今公大業を輔贊して、先帝の志を成し、寇遠く自ら送る、將士威德に憑り頼りて、身を出だし命を用ふ、一旦非常の功有らば、豈に宗廟神靈社稷の福に非ずや！宜しく且に兵を安んじ鋭を養い、釁を觀て動かんとすべし。今此の勢に乗じ、復た大いに出でんと欲するも、天の時未だ可とすべからず。而して任を苟めにし意を盛んにして、私心の以て不安を爲すなり。」恪論を題するの後、書を爲して友に答へて曰く：「足下自然の理有ると雖も、然るに未だ大數を見ず。此の論を熟省して、以て開悟す可し。」

とあり、滕胤の意見と諸葛恪の對應については『呉志』卷六十四滕胤傳に

恪將に衆を悉くして魏を伐たんとするに、胤恪を諫めて曰く：「君喪代の際を以て、伊、霍の託を受け、入りて本朝を安んじ、出でては強敵を摧き、名聲は海内に振うに、天下震動せざるなく、萬姓の心、君に蒙りて息するを得るを冀ふ。今猥りに勞役の後を以て、師を興し征に出づる、民は疲れ力は屈し、遠主に備へ有り。若し城を攻めて克たず、野略して獲る無くんば、是れ前の勞を喪ひ而して後に責を招くなり。甲を安んじ師を息め、隙を觀て動くにしかず。且つ兵は大事、事は衆を以て濟す、衆苟しくも悦ばず、君獨り之を安くにせんや！」恪曰く：「諸の不可と云ふ者は、皆計算を見ずして、居を懷ひ苟しくも安んずる者なり、而るに子復た以て然りと爲す、吾れ何をか望まん？夫れ曹芳闇劣にして、政私門に在るを以て、彼の臣民、固より離心有り。今吾れ國家の資を藉り、戰勝の威に因らば、則ち何くに往きて克たざらんや！」

とある。

37) 渡邊論文2には

かかる諸葛恪の政策は、北伐の正統性を論じる中で、叔父諸葛亮の「出師表」に言及していることから考えると、蜀漢において「名士」政權を樹立していた諸葛亮の北伐による軍部の掌握に範を仰いだ可能性が高い。

とある。

38) 渡邊論文2には

諸葛恪は、孫權期には君主權力が完全に掌握していた軍事力を、皇帝權力やその延長の宗室から切り離そうと試みたのだ。その上で、北伐を主導することを通じて、軍事力を自己の規制下に置き、「名士」政權を確立しようとしたので

ある。

とある。ちなみに、魏の側から見た諸葛恪政權については、『魏志』卷二十八鄧艾傳に

諸葛恪合肥新城を圍むも、克たず、退きて歸る。艾景王に言ひて曰く：「孫權已に没して、大臣未だ附せず、呉の名宗大族、皆部曲有り、兵に阻り勢に仗り、以て命を建つるに足れり。恪新たに國政を乗るも、内に其の主無く、上下を撫恤して以て根基を立つるを念はず、外事を競ひ、其の民を虐用し、國の衆を悉くして、堅城に頓し、死する者萬數、禍を載せて歸る、此れ恪罪を獲るの日なり。昔子胥、呉起、商鞅、樂毅皆時君に任ぜられるも、主没して敗る。況んや恪の才四賢に非ずして、大患を慮らず、其れ亡ぶるを待つ可きなり。」恪歸りて、果して誅せらる。

とあり、これも北伐による軍事力の掌握の傍證となるであろう。なお、竹澤英輝「『諸葛氏集』と『後出師表』の真偽について」(『愛知論叢』2002年)では、「後出師表」が諸葛恪による偽作であったという可能性について考察している。

### 39) 渡邊論文2

- 40) 村田哲也氏は「孫呉政權後期政治史の一考察—孫權死後の北伐論の展開から」(『東洋史苑』52・53 1999年、以下村田論文と略記)において諸葛恪の北伐論とそれに對する滕胤・聶友の反對論について述べておられる。そこでは、諸葛恪の北伐が積極的な軍事行動を伴う北方との對決路線の維持か國力充實のために防衛・内政を重視する路線を取るかという當時の孫呉政權が直面していた課題について正面から取り組もうとした末に行われたものであり、「従来の對決路線を維持しさらに積極的な攻勢に出る」というのが諸葛恪の解答であって『吳志』卷六十四諸葛恪傳にあるような功名心に驅られたために行われたわけではないこと、滕胤・聶友の反對論は出身地域に關係なく(滕胤は北来士人、聶友は江南出身)朝廷内が北伐反對に傾いており諸葛恪の意見が政權の總意とは到底言い得ないことを指摘しておられる。渡邊論文1によると、滕胤・聶友は共に「名士」ということになるようで、出身地域による相違はそれほど關係なくなるが、渡邊氏の論に則ったとしても諸葛恪の北伐は「名士」たちの反對を受けていたことになり、諸葛恪政權が「名士」の價值基準に依據した「名士」政權であったとはなおさら言えなくなるのではないか。

- 41) 村田論文には「孫權の死と幼君の即位という危急の際に於て、諸葛恪と反對派がすぐさま全面的な對立に向かったわけではなく、むしろ諸葛恪の排除の背景は、政治的な黨派争いが原因というよりも、「民の怨み多く、衆の嫌う所となるに因」る狀況が、不安定な政權に危機をもたらすのではないかという朝廷内の不安感にあったのではないだろうか」とある。しかし、この事から考えると、確かにすぐに全面的對立になったわけではなく、北伐の失敗とそれによる怨嗟という原因もあったにせよ、二宮の變をひきずった政治的黨派争いが關連していたことは間違

いないであろう。

42) 渡邊論文2注(二八)

43) 『魏志』卷十賈詡傳には

帝詡に問ひて曰く：「吾れ命に従わざるを伐ち以て天下を一つにせんと欲す、吳、蜀何れを先にせんや？」對へて曰く：「……吳、蜀は蕞爾の小國と雖も、山水に依阻し、劉備は雄才有り、諸葛亮は善く國を治む、(後略)。」

とあり、魏志卷十四劉曄傳には

曄進みて曰く：「……劉備は人傑なり、度有るも遅し、蜀を得て日淺く、蜀人未だ恃まざるなり。今漢中を擧げれば、蜀人震ひ恐れ、其勢自ら傾く。公の神明を以て、其の傾くに因りて之を壓せば、克たざる無きなり。若し小しく之を緩くせば、諸葛亮治に明らかにして相と爲り、關羽、張飛は勇三軍に冠たりて將と爲る、蜀の民既に定まり、險に據り要を守る、則ち犯す可からず。今取らざるは、必ず後の憂ひと爲らん。」

という曹操の漢中平定後の劉曄の進言を載せている。これを見ると、諸葛亮の政治能力への評價は非常に高いことがわかる。蜀漢内部での評價についても『三國志』蜀書卷四十一張裔傳には

既に蜀に至り、丞相亮以て參軍と爲し、府事を署せしめ、又益州治中從事を領せしむ。亮出でて漢中に駐し、裔射聲校尉を以て留府長史を領す。常に稱して曰く：「公賞は遠きを遺さず、罰は近きに阿らず、爵は功無きを以て取る可からず、刑は貴勢を以て免る可からず、此れ賢愚の僉其の身を忘るる所以の者なり。」

とあり、諸葛亮の公平無私な賞罰・人事への賞賛となっている。このような諸葛亮への評價に関しては數多くの諸葛亮に関する研究文獻・著作で指摘されているが、ここでは宮川尚志『諸葛孔明—「三國志」とその時代—』(富山房 1940年、桃源社 1966年、光風社出版 1984年)、中林史朗『諸葛孔明語録』(明德出版社 1986年)、渡邊義浩『諸葛亮孔明 その虚像と實像』(新人物往来社 1998年)を擧げておく。

44) 「諸葛」姓の持つシンボリックな意味という視點についても、石井仁氏から直接ご教示戴いたことに負うところが大きい。注30)の「分天下文」に関するご教示と合わせて、氏に深く感謝したい。

【表1】裴松之注所引『吳書』佚文目錄

番號	『三國志』卷數・紀傳名	中華書局『三國志』頁數	『吳書』本紀・列傳名(推定)
1	卷一武帝紀	11頁	曹操傳?・陶謙傳?
2	卷六董卓傳	172頁	董卓傳
3	卷六袁紹傳	207頁	袁紹傳?
4	卷六袁紹傳	208頁	袁紹傳
5	卷六袁術傳	210頁	袁術傳
6	卷八公孫瓚傳	240頁	劉虞傳
7	卷八公孫瓚傳	241~2頁	袁術傳?・劉虞傳?
8	卷八陶謙傳	248頁	陶謙傳
9	卷八陶謙傳	248頁	陶謙傳
10	卷八陶謙傳	248~9頁	陶謙傳
11	卷八陶謙傳	249~50頁	陶謙傳
12	卷八陶謙傳	250頁	陶謙傳
13	卷八公孫淵傳	254~5頁	大皇帝紀?公孫淵傳?
14	卷八公孫淵傳	258頁	公孫淵傳
15	卷八張繡傳	263頁	張繡傳
16	卷十二崔琰傳	374頁	曹操傳?・婁圭傳?
17	卷三十一劉璋傳	869頁	劉璋傳
18	卷三十一劉璋傳	870頁	劉璋傳?・劉闡傳?
19	卷三十二先主傳	881頁	劉備傳
20	卷三十六關羽傳	942頁	大皇帝紀?・關羽傳?
21	卷四十六孫破虜傳	1093頁	武烈皇帝紀
22	卷四十六孫破虜傳	1094頁	武烈皇帝紀
23	卷四十六孫破虜傳	1099頁	武烈皇帝紀
24	卷四十七吳主傳	1123~24頁	趙咨傳
25	卷四十七吳主傳	1124頁	沈珩傳
26	卷四十七吳主傳	1129頁	鄭泉傳
27	卷四十七吳主傳	1130~1頁	大皇帝紀, 馮熙傳
28	卷四十七吳主傳	1132頁	大皇帝紀, 陳化傳
29	卷四十七吳主傳	1139~40頁	大皇帝紀
30	卷四十八孫皓傳	1167頁	丁固傳
31	卷四十九劉繇傳	1186頁	劉基傳
32	卷四十九太史慈傳	1190頁	太史慈傳
33	卷四十九太史慈傳	1191頁	太史慈傳附太史亨傳
34	卷四十九士燮傳	1191頁	士壹傳?士燮傳?
35	卷五十吳夫人傳	1196頁	吳夫人傳?吳奮傳?
36	卷五十吳夫人傳	1196頁	吳夫人傳?吳祺傳?
37	卷五十王夫人(琅邪)傳	1199頁	王夫人傳

38	卷五十一孫賁傳	1210頁	孫香傳
39	卷五十一孫賁傳附孫鄰傳	1210頁	孫賁傳附孫鄰傳？
40	卷五十一孫韶傳	1214頁	孫河傳
41	卷五十一孫桓傳	1217頁	孫河傳
42	卷五十一孫桓傳	1217頁	孫桓傳附孫俊傳
43	卷五十二張昭傳	1220頁	張昭傳
44	卷五十二張昭傳	1221頁	張昭傳
45	卷五十二張昭傳	1225頁	張昭傳附張休傳
46	卷五十二顧雍傳	1228～9頁	顧雍傳附顧徽・顧悌傳
47	卷五十二顧雍傳附顧譚傳	1231頁	顧雍傳附顧譚傳
48	卷五十二諸葛瑾傳	1232頁	諸葛瑾傳
49	卷五十二諸葛瑾傳	1235頁	諸葛瑾傳
50	卷五十二諸葛瑾傳	1236頁	諸葛瑾傳附諸葛融傳
51	卷五十二步騭傳	1236頁	步騭傳
52	卷五十二步騭傳	1236頁	步騭傳
53	卷五十二步騭傳	1237頁	步騭傳
54	卷五十二步騭傳	1237頁	步騭傳
55	卷五十二步騭傳	1238頁	李肅傳
56	卷五十三張紘傳	1243頁	張紘傳
57	卷五十三張紘傳	1243頁	張紘傳
58	卷五十三張紘傳	1243頁	張紘傳
59	卷五十三張紘傳	1244頁	張紘傳
60	卷五十三張紘傳	1244頁	張紘傳
61	卷五十三張紘傳	1245頁	張紘傳
62	卷五十三張紘傳	1246～7頁	張紘傳
63	卷五十三嚴畯傳	1248頁	嚴畯傳
64	卷五十三薛綜傳	1254頁	薛綜傳
65	卷五十四魯肅傳	1267～8頁	魯肅傳
66	卷五十四魯肅傳	1272頁	魯肅傳
67	卷五十四魯肅傳	1273頁	魯肅傳
68	卷五十四呂蒙傳	1276頁	呂蒙傳
69	卷五十四呂蒙傳	1279頁	呂蒙傳
70	卷五十五程普傳	1284頁	程普傳
71	卷五十五黃蓋傳	1284頁	黃蓋傳
72	卷五十五黃蓋傳	1285頁	黃蓋傳
73	卷五十五黃蓋傳	1285頁	黃蓋傳
74	卷五十五韓當傳	1286頁	韓當傳
75	卷五十五韓當傳	1286頁	韓當傳附韓綜傳
76	卷五十五甘寧傳	1292頁	甘寧傳

77	卷五十五甘寧傳	1292頁	甘寧傳
78	卷五十五甘寧傳	1292頁	甘寧傳
79	卷五十五甘寧傳	1293頁	甘寧傳
80	卷五十五甘寧傳	1295頁	甘寧傳
81	卷五十五浚統傳	1297頁	浚統傳
82	卷五十六朱治傳	1305頁	朱治傳附朱才傳
83	卷五十六朱桓傳	1316頁	朱桓傳附朱異傳
84	卷五十六朱桓傳	1316頁	朱桓傳附朱異傳
85	卷五十七虞翻傳	1317頁	虞翻傳
86	卷五十七虞翻傳	1317頁	虞翻傳
87	卷五十七虞翻傳	1318頁	虞翻傳
88	卷五十七虞翻傳	1319頁	虞翻傳
89	卷五十七虞翻傳	1320頁	虞翻傳
90	卷五十七虞翻傳	1321頁	虞翻傳
91	卷五十七虞翻傳	1324頁	虞翻傳
92	卷五十八陸遜傳	1345頁	陸遜傳
93	卷五十八陸遜傳	1347頁	陸遜傳
94	卷五十九孫登傳	1364頁	羊衡傳
95	卷五十九孫登傳	1365頁	宣太子(孫登)傳
96	卷五十九孫登傳	1366頁	宣太子(孫登)傳
97	卷五十九孫慮傳	1367頁	孫慮傳
98	卷五十九孫和傳	1368頁	南陽王(孫和)傳
99	卷五十九孫和傳	1370頁	張純傳? 南陽王(孫和)傳?
100	卷五十九孫和傳	1370頁	南陽王(孫和)傳
101	卷五十九孫和傳	1370~1頁	南陽王(孫和)傳
102	卷五十九孫和傳	1371頁	南陽王(孫和)傳? 孟仁傳?
103	卷六十賀齊傳	1379頁	賀齊傳
104	卷六十全琮傳	1382頁	全琮傳
105	卷六十全琮傳	1383頁	全琮傳附全緒傳
106	卷六十呂岱傳	1384頁	呂岱傳
107	卷六十一潘濬傳	1397頁	潘濬傳
108	卷六十一潘濬傳	1398頁	潘濬傳, 芮玄傳
109	卷六十一潘濬傳	1398頁	潘濬傳
110	卷六十一潘濬傳	1399頁	潘濬傳附潘翥傳
111	卷六十三趙達傳	1425頁	趙達傳
112	卷六十四諸葛恪傳	1433~4頁	諸葛恪傳
113	卷六十四滕胤傳	1443頁	滕胤傳
114	卷六十四滕胤傳	1443頁	滕胤傳
115	卷六十四滕胤傳	1444頁	滕胤傳

116	卷六十四孫峻傳	1445頁	留贊傳
117	卷六十五賀邵傳	1456頁	賀齊傳(賀邵傳)

〔表2〕『太平御覽』所引『吳書』佚文目録

番號	『太平御覽』卷數	『吳書』本紀・列傳名(推定)	備考
1	卷一五一	南陽王(孫和)傳	裴注所引『吳書』〔表1〕番號(以下省略)101, 太平御覽〔表2〕番號(以下省略)43と共通
2	卷一七〇	非『吳書』?	
3	卷一八九	魏滕傳? 非『吳書』?	『吳志』孫破虜吳夫人傳裴注『曾稽典錄』
4	卷一九〇	非『吳書』?	「健康」とあり, 『吳書』の記事とは思えない。
5	卷二六三	陸遜傳	『吳志』陸遜傳本文+92
6	卷二七七	魯肅傳	67, 藝文類聚9, 北堂書鈔〔表3〕番號(以下省略)8・13
7	卷三二四	非『吳書』	『吳志』孫皓傳本文+裴注所引『晉陽秋』
8	卷三三〇	趙咨傳	24, 北堂書鈔3, 文選五臣注1
9	卷三三九	賀齊傳	
10	卷三四二	太史慈傳	32
11	卷三四五	甘寧傳	80, 事類賦注3, 北堂書鈔10・12, 初學記2, 太平御覽29, 藝文類聚6
12	卷三五三	虞翻傳	87, 太平御覽21
13	卷三六七	非『吳書』?	『吳志』諸葛恪傳+裴注所引『吳錄』
14	卷三七一	馮熙傳	27・北堂書鈔4
15	卷三七六	武烈皇帝(孫堅)紀	21, 藝文類聚2, 太平御覽27
16	卷三八四	虞翻傳	85, 藝文類聚10, 太平御覽44・47
17	卷三八四	非『吳書』?	『吳志』吳主傳裴注所引『吳錄』
18	卷三八四	陸績傳? 非『吳書』?	『吳志』陸績傳本文
19	卷三八九	非『吳書』(一部張純傳)?	98末尾+『吳志』孫和傳裴注所引『吳錄』
20	卷三九三	虞翻傳	90, 初學記1
21	卷三九四	虞翻傳	87, 太平御覽12
22	卷四三二	顧雍傳附顧徽傳, 顧悌傳	46, 藝文類聚3・11, 太平御覽35・46
23	卷四四二	陶謙傳	9+「後爲徐州刺史」, 後漢書3, 北堂書鈔8, 藝文類聚7, 事類賦注2, 太平御覽31
24	卷四七一	曹操傳? 婁圭傳?	16, 太平御覽33
25	卷四九二	薛綜傳? 非『吳書』?	『吳志』薛綜傳本文, 太平御覽58
26	卷五四一	陶謙傳	8+「後爲徐州牧」, 後漢書2, 北堂書鈔6
27	卷五五七	武烈皇帝(孫堅)紀	21, 藝文類聚2, 太平御覽15
28	卷五七〇	留贊傳	116, 北堂書鈔7・11
29	卷五七四	甘寧傳	80, 事類賦注3, 北堂書鈔10・12, 初學記2, 藝文類聚6, 太平御覽11

30	卷五七四	陸遜傳	藝文類聚 8, 北堂書鈔15, 事類賦注 1
31	卷五七四	陶謙傳	9, 後漢書 3, 藝文類聚 7, 事類賦注 2, 北堂書鈔 8, 太平御覽23
32	卷五八七	張紘傳	62, 北堂書鈔20, 太平御覽38
33	卷六八一	曹操傳? 婁圭傳?	16, 太平御覽24
34	卷六八二	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 文選 1・2・5, 後漢書 4・6 (後漢書により近い)
35	卷六八七	顧雍傳附顧徽傳, 顧悌傳	46, 藝文類聚 3・11, 太平御覽22・46
36	卷六八九	周瑜傳	北堂書鈔16
37	卷六九六	陸遜傳	北堂書鈔18, 藝文類聚12
38	卷七〇七	張紘傳	62, 北堂書鈔20, 太平御覽32
39	卷七一〇	全琮傳	北堂書鈔16
40	卷七四〇	程普傳	70
41	卷七七〇	陸遜傳	北堂書鈔21, 藝文類聚13, 太平御覽45
42	卷七七一	甘寧傳	77, 初學記 4・5, 北堂書鈔23, 事類賦注 4
43	卷七七一	南陽王(孫和)傳	101, 太平御覽1 (孫和が孫弘となっている)
44	卷八〇八	虞翻傳	85, 藝文類聚10, 太平御覽16・47
45	卷八一四	陸遜傳	北堂書鈔21, 藝文類聚13, 太平御覽41 (舟也が丹漆となっている)
46	卷八一九	顧雍傳附顧徽傳, 顧悌傳	46, 藝文類聚 3・11, 太平御覽22・35
47	卷八三〇	虞翻傳	85, 藝文類聚10, 太平御覽16・44
48	卷八三三	鄭泉傳	26, 類林 1, 藝文類聚 5, 太平御覽50
49	卷八三五	大皇帝紀? 非『吳書』?	『吳志』吳主傳本文
50	卷八四六	鄭泉傳	26, 類林 1, 藝文類聚 5, 太平御覽48
51	卷八五〇	袁術傳?	藝文類聚14, 北堂書鈔24
52	卷八五〇	是儀傳? 非『吳書』?	『吳志』是儀傳本文
53	卷八五三	袁術傳	5, 北堂書鈔25, 太平御覽54・55
54	卷八五七	袁術傳	5, 北堂書鈔25, 太平御覽52・55
55	卷八六一	袁術傳	5, 北堂書鈔25, 太平御覽52・54
56	卷八九四	武烈皇帝(孫堅)紀	22
57	卷八九四	諸葛恪傳	『吳志』諸葛恪傳, 事類賦注 6
58	卷九四〇	薛綜傳? 非『吳書』?	太平御覽25
59	卷九七六	趙咨傳	
60	卷九八四	浚統傳	81
61	卷九九六	徐盛傳	



〔表3〕『後漢書』章懷太子注及び類書所引『吳書』佚文目録

書名・番號	卷數	『吳書』本紀・列傳名(推定)	備考
後漢書 1	卷四十五周榮傳附周忠傳	周瑜傳?	
後漢書 2	卷七十三陶謙傳	陶謙傳	8, 北堂書鈔 8, 太平御覽 23
後漢書 3	卷七十三陶謙傳	陶謙傳	9, 北堂書鈔 8, 藝文類聚 7, 事類賦注 2, 太平御覽 23・31
後漢書 4	卷七十五袁術傳	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 後漢書 6, 文選 1・2・5, 太平御覽 34
後漢書 5	志卷十八五行六	袁術傳?	
後漢書 6	志卷三十輿服下	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 後漢書 4, 文選 1・2・5, 太平御覽 34
世說新語 1	方正第五	陸遜傳	『吳志』陸遜傳本文と類似
世說新語 2	品藻第九	諸葛瑾傳	48
世說新語 3	品藻第九	諸葛瑾傳	『吳志』諸葛瑾傳本文と類似
北堂書鈔 1	卷三十五政術部德化	孟宗傳	
北堂書鈔 2	卷四十政術部奉使	沈珩傳	25, 文選李善注 7
北堂書鈔 3	卷四十政術部奉使	趙咨傳	24, 太平御覽 8
北堂書鈔 4	卷四十政術部奉使	馮熙傳	27・太平御覽 14
北堂書鈔 5	卷四十政術部奉使	馮熙傳	「『吳書』馮熙傳見前。」とある。
北堂書鈔 6	卷六十設官部十二尚書 令史吏部尚書	李肅傳	55
北堂書鈔 7	卷六十一設官部十三五 校尉	留贊傳	116, 北堂書鈔 11, 太平御覽 28
北堂書鈔 8	卷六十九設官部二十一公府 舍人	陶謙傳	8・9・10, 後漢書 3, 藝文類聚 7, 事類賦注 2, 太平御覽 23・31
北堂書鈔 9	卷七十三設官部二十五別駕	陸遜傳	92
北堂書鈔 10	卷九十八藝文部四談講	魯肅傳	67
北堂書鈔 11	卷一百六樂部歌篇	留贊傳	116, 北堂書鈔 7, 太平御覽 28
北堂書鈔 12	卷一百七樂部舞篇	甘寧傳	80, 初學記 2, 事類賦注 3, 北堂書鈔 14, 藝文類聚 6, 太平御覽 11・29
北堂書鈔 13	卷一百十五武功部三將帥	魯肅傳	67, 藝文類聚 9, 太平御覽 6
北堂書鈔 14	卷一百二十三武功部十一刀	甘寧傳	80, 初學記 2, 事類賦注 3, 北堂書鈔 12, 藝文類聚 6, 太平御覽 11・29
北堂書鈔 15	卷一百二十四武功部十二戟三十六	甘寧傳	「甘寧舞戟 吳書見前刀篇。」とある。
北堂書鈔 16	卷一百二十九衣冠部三衣	周瑜傳	太平御覽 36
北堂書鈔 17	卷一百二十九衣冠部三裘	大皇帝紀? 陸遜傳?	藝文類聚 8, 事類賦注 1

北堂書鈔18	卷一百二十九衣冠部三 絡帶	大皇帝紀?陸遜傳?	藝文類聚12, 太平御覽37
北堂書鈔19	卷一百三十三儀飾部四杖	全琮傳?	
北堂書鈔20	卷一百三十四儀飾部五 枕二十六	張紘傳	62, 太平御覽32・38
北堂書鈔21	卷一百三十七舟部舟總篇	大皇帝紀?陸遜 傳?	藝文類聚13, 太平御覽41・45
北堂書鈔22	卷一百三十七舟部舟總篇	洪規傳?	
北堂書鈔23	卷一百三十八舟部纜十六	甘寧傳	77, 初學記4・5, 事類賦注4, 太平御覽42
北堂書鈔24	卷一百四十四酒食部飯篇	袁術傳?	藝文類聚14, 太平御覽51
北堂書鈔25	卷一百四十七酒食部蜜	袁術傳	5, 太平御覽53・54・55
藝文類聚1	卷六地部 關	陸凱傳	
藝文類聚2	卷十符命部 符命	武烈皇帝(孫堅)紀	21, 太平御覽15・27
藝文類聚3	卷二十八人部 孝	顧悌傳	46, 藝文類聚11, 太平御覽22・ 35・46
藝文類聚4	卷二十一一人部 友悌	劉基傳?	31(裴注所引「吳書」では劉繇が劉 基となっている), 文選李善注3
藝文類聚5	卷二十六人部 誌	鄭泉傳	26, 太平御覽48・50, 類林1
藝文類聚6	卷三十三人部 報讎	甘寧傳	80, 初學記2, 北堂書鈔12・14, 事類賦注3, 太平御覽11・29
藝文類聚7	卷四十三樂部 舞	陶謙傳	9, 後漢書3, 北堂書鈔8, 事 類賦注2, 太平御覽23・31
藝文類聚8	卷四十三樂部 舞	大皇帝紀?陸遜傳?	北堂書鈔17, 事類賦注1
藝文類聚9	卷五十九武部 將帥	魯肅傳	67, 北堂書鈔8, 太平御覽6
藝文類聚10	卷六十五產業部上 鍼	虞翻傳	85, 太平御覽16・44・47
藝文類聚11	卷六十七衣冠部 衣裳	顧悌傳	46, 藝文類聚3, 太平御覽22・ 35・46
藝文類聚12	卷六十七衣冠部 帶	大皇帝紀?陸遜傳?	北堂書鈔18, 太平御覽37
藝文類聚13	卷七十一舟車部 舟	大皇帝紀?陸遜傳?	北堂書鈔21, 太平御覽41・45
藝文類聚14	卷一百災異部 蝗	袁術傳?	北堂書鈔23, 太平御覽51
類林1	嗜酒篇第三十六	鄭泉傳	26, 藝文類聚5, 太平御覽48・50
文選李善注 1	卷三十雜詩下「和伏武昌 登孫權故城」	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 後漢書4・6, 文選2・5, 太平御覽34
文選李善注 2	卷三十八表下「爲吳令謝 詢求爲諸孫置冢人表」	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 後漢書4・6, 文選1・5, 太平御覽34
文選李善注 3	卷三十八表下「爲蕭揚州 薦士表」	劉基傳	31, 藝文類聚4
文選李善注 4	卷四十二書中「爲曹公作 書與孫權」	大皇帝紀	「文選考異」(〔清〕胡克家〔撰〕, 孫志祖〔輯〕)では李善注とする ことに疑義を呈す

文選李善注 5	卷五十三論三「辯亡論」	武烈皇帝(孫堅)紀	23, 後漢書4・6, 文選1・2, 太平御覽34
文選李善注 6	卷五十三論三「辯亡論」	趙咨傳	24, 北堂書鈔2・3, 太平御覽8
文選李善注 7	卷五十三論三「辯亡論」	沈珩傳	25, 北堂書鈔2・3, 太平御覽8
初學記1	卷九帝王部	虞翻傳	『吳志』虞翻傳・(90)
初學記2	卷二十政理部赦	呂蒙傳	
初學記3	卷二十二武部刀	甘寧傳	80, 北堂書鈔12・14, 藝文類聚6, 太平御覽11・29, 事類賦3
初學記4	卷二十五器物部舟	甘寧傳	77・北堂書鈔23・初學記5・太平御覽42・事類賦4
初學記5	卷二十八部宝器部錦	甘寧傳	77・北堂書鈔23・初學記4・太平御覽42・事類賦4
事類賦注1	卷十一樂部 舞	大皇帝紀? 陸遜傳?	北堂書鈔17, 藝文類聚8
事類賦注2	卷十一樂部 舞	陶謙傳	9, 後漢書3, 北堂書鈔8, 藝文類聚7, 太平御覽23・31
事類賦注3	卷十一樂部 舞	甘寧傳	80, 北堂書鈔12・14, 初學記2, 藝文類聚6, 太平御覽11・29
事類賦注4	卷十六服用部 舟	甘寧傳	77, 初學記4・5, 北堂書鈔22, 太平御覽42
事類賦注5	卷二十獸部 象	賀齊傳	『吳志』賀齊傳+103
事類賦注6	卷二十一獸部 馬	諸葛恪傳	『吳志』諸葛恪傳, 太平御覽57